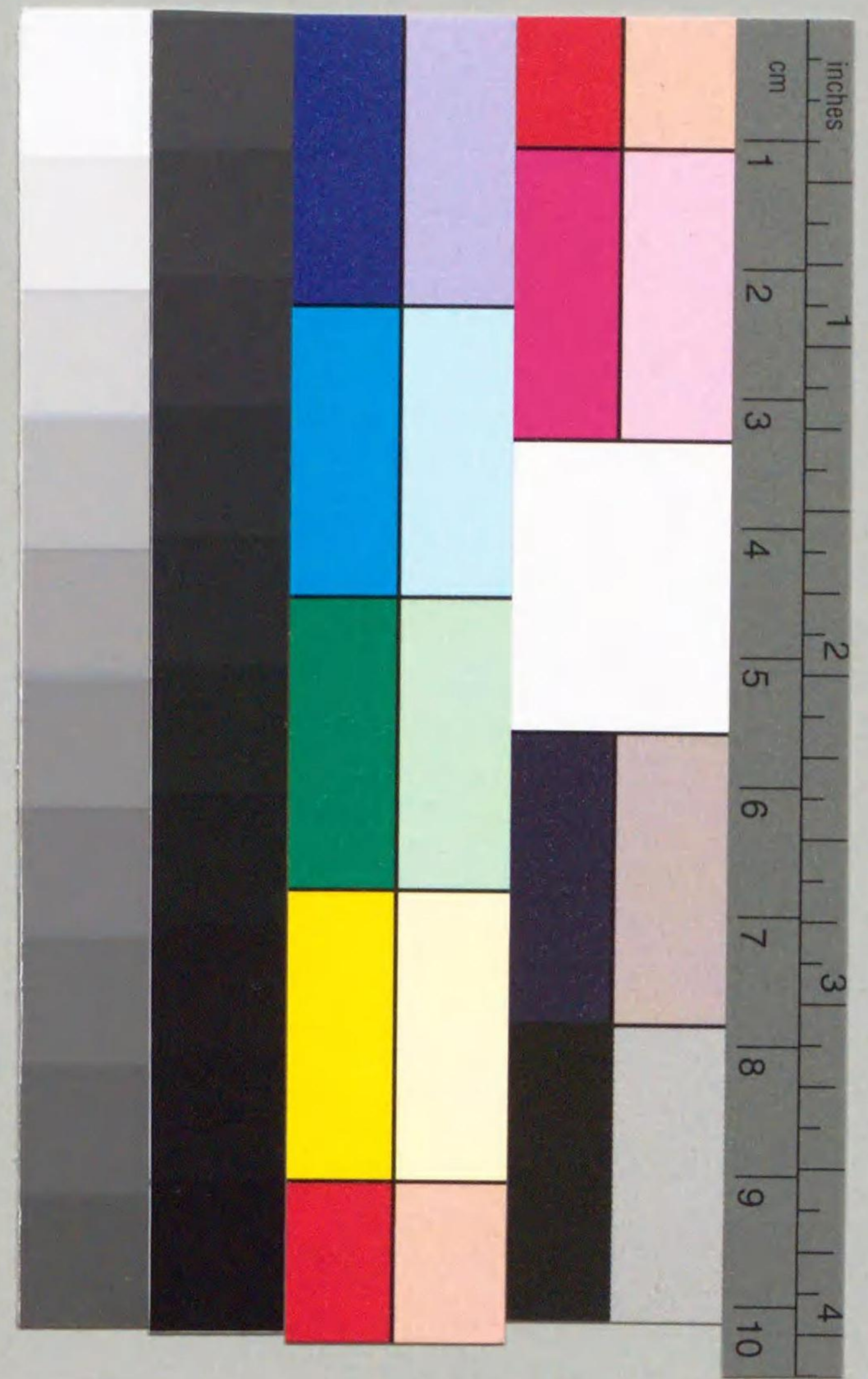
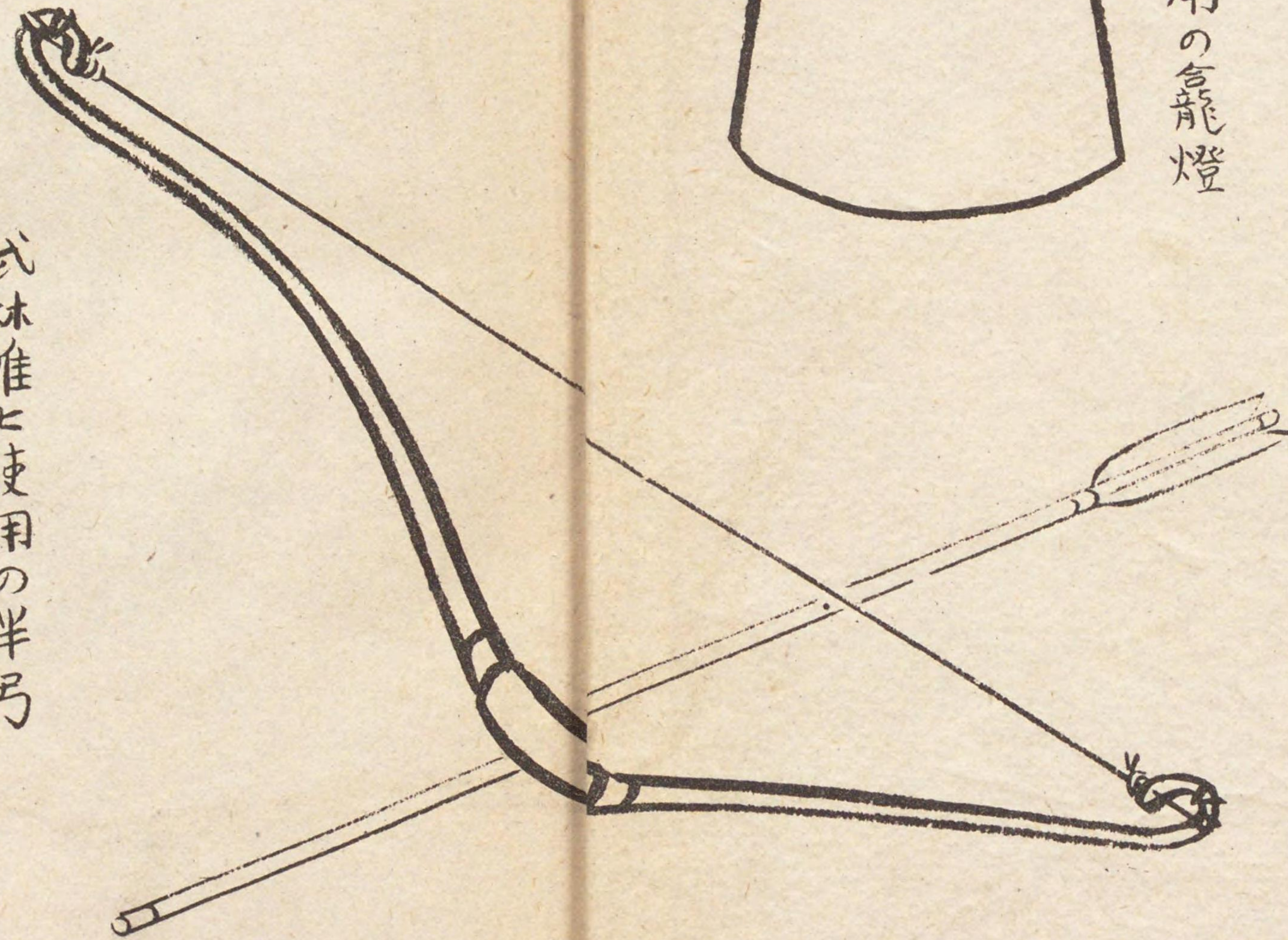


赤穂義士

435
65



武林唯七使用の半弓



堀部彌兵衛使用の籠燈

赤穂義士
三島霜川著

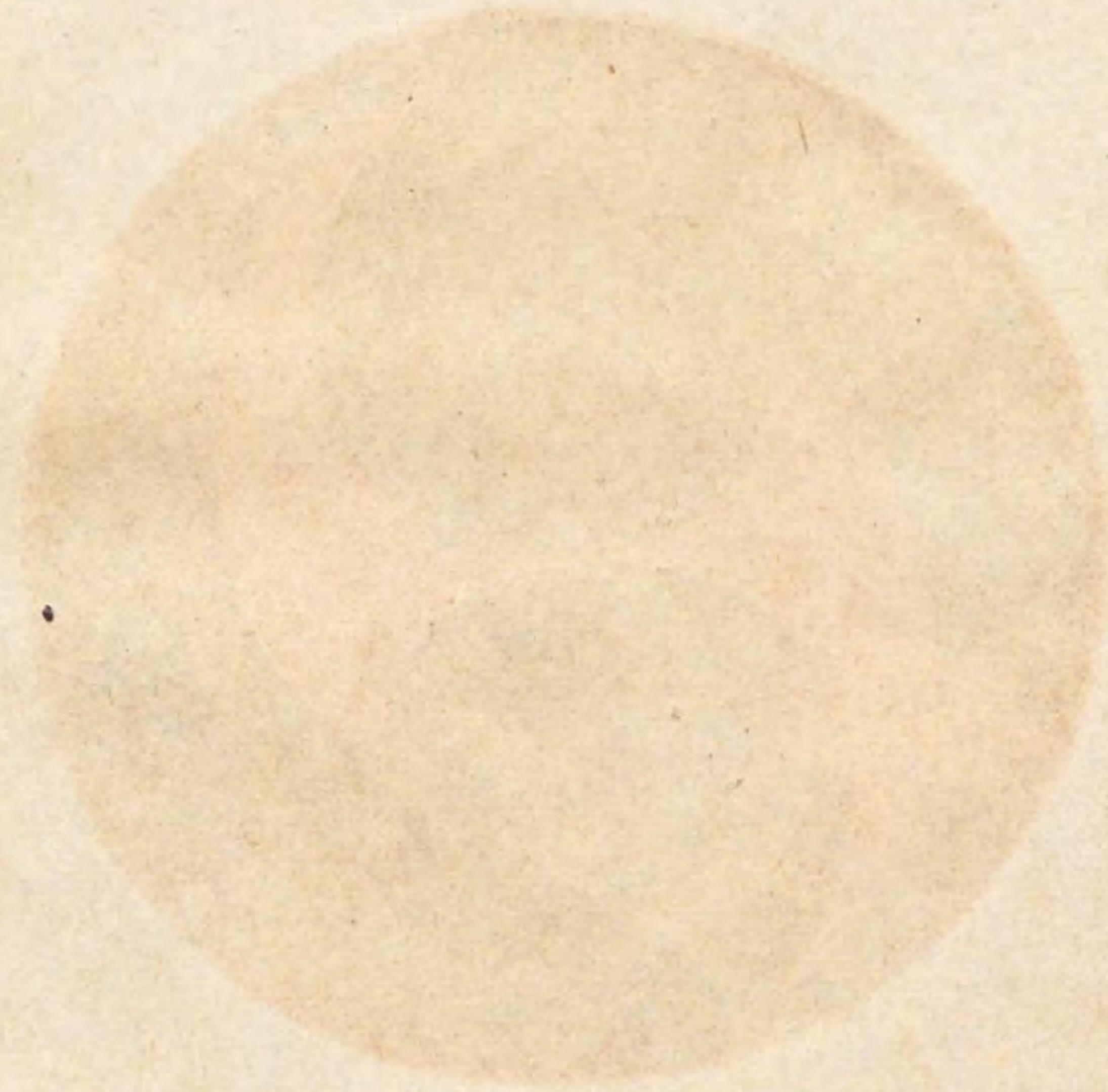


兒童の友社

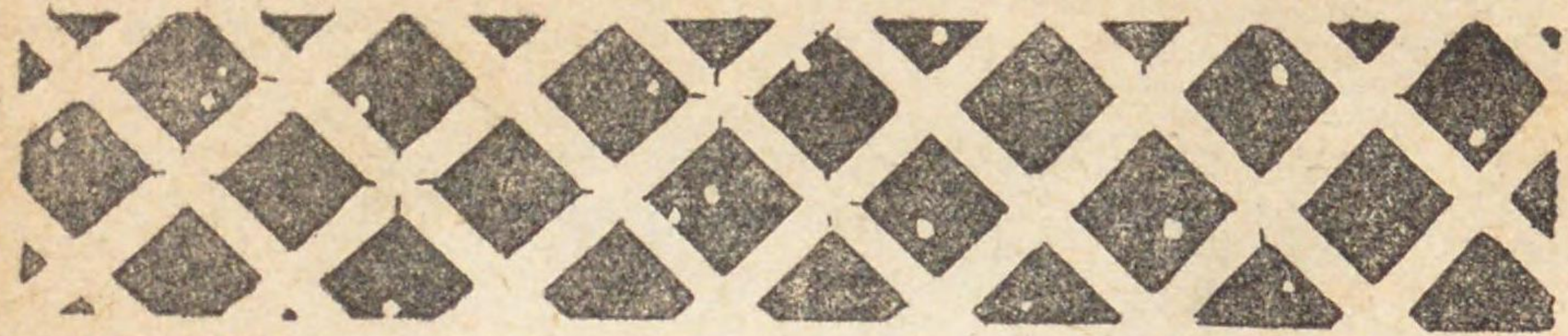




43
M-1



151938

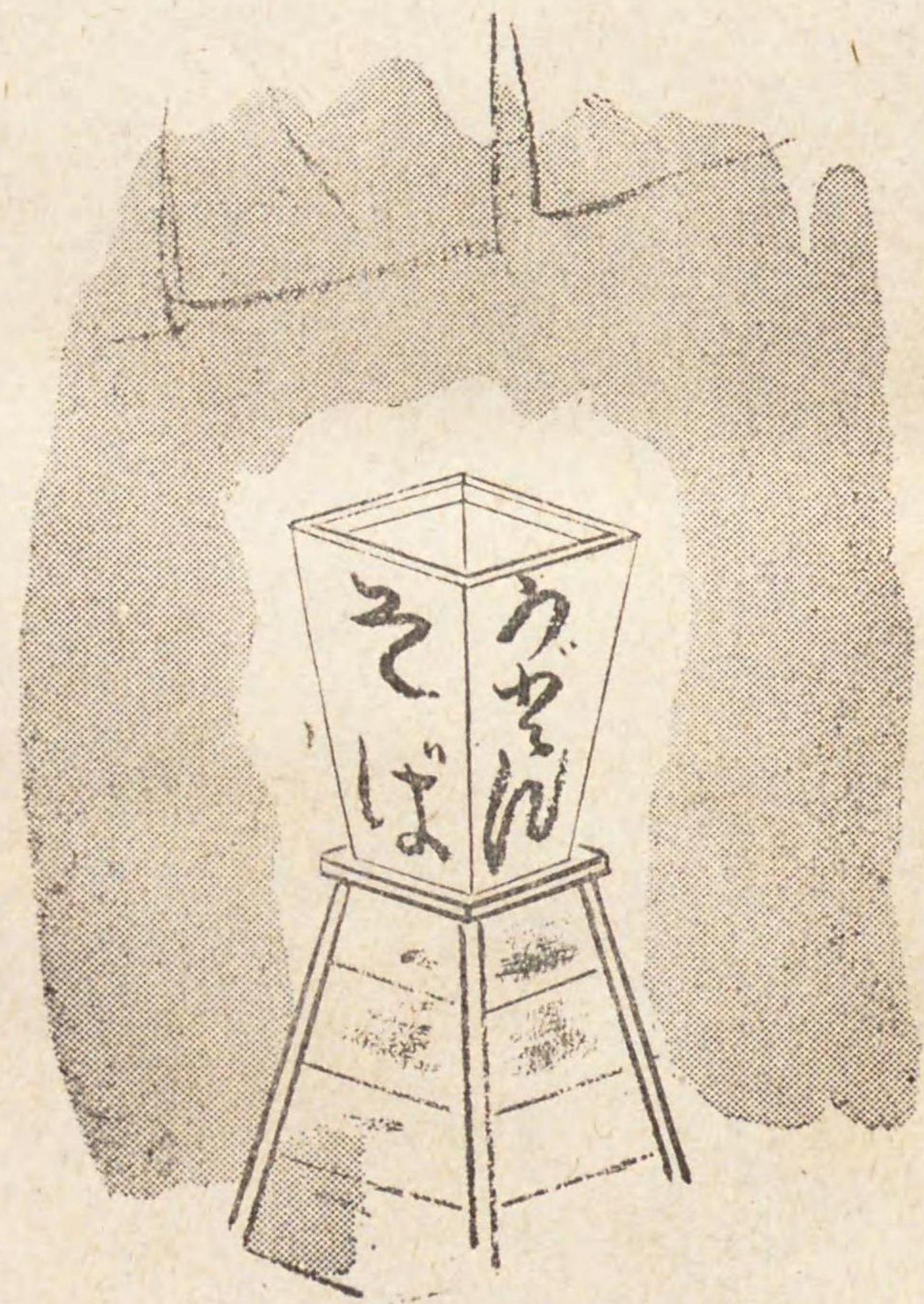


目次

一、三月十四日	………	三
二、内匠頭の切腹	………	三三
三、赤穂城	………	六二
四、敵討の盟約	………	八一
五、哀しき離散	………	一〇五
六、一年と七ヶ月の間	………	一四四
七、討入の準備	………	一五五
八、十二月十四日	………	一八八
九、亂闘	………	二二〇

赤穂義士

三島霜川著



著者紹介

三島霜川先生は、明治九年富山縣のお生れ、劇、國史の方面に深い研究を持たれたお方で、かつて明治の文壇に先生が華々しい活躍をなされたことは、今も人々の記憶に新たであります。晩年は専ら少國民のために流麗な筆を揮つて居りましたが、昭和九年に^な歿されたことはまことに残念なことであります。

著書には、「川中島合戦」「關ヶ原合戦」等、劇、歴史に關するものをたくさん残して居られます。

一 三月十四日

元祿十四年三月十四日。この日は、淺野内匠頭にとつても、また、
赤穂の家來たちにとつても、大悪日でした。江戸城の御殿で、吉
良上野介を斬つた淺野内匠頭は、その日のうちに、腹を切らせら
れてしまひました。

『何ですか、何事が起つたのですか。』

『さやう、大げんくわとか申すことでございますが。』

『いえいえ、私が聞きましたのでは、双傷だとか申しますが。』

『双傷……。それは大へんでございます。お大名でございませうか、お
旗本衆でございませうか。』

『わかりません。』

『一たい、相手は誰ですか。相對あひたいですか。それとも大ぜいでですか……。』
『存じません。』

江戸城の大手、櫻田の兩門外——。その下馬先げばさきで、大ぜいごたごたしてゐる諸大名のお供のものは、みんな主人々々の身の上を心配して、顔をまつ青にしてゐました。

その日は、徳川五代將軍綱吉つなよしが、江戸城へ、勅使ちよくしと院使ゐんし（靈元上皇れいげんじょうわう）とをお迎へして、奉答の儀式のある日でした。勅使はそれまでに、十二日十三日と、つづいて登城されて、勅命をつたへ、またいろいろ饗應きやうおうの式もあつたのですが、十四日はことに、將軍奉答の日として、江戸城ではすべて非常に嚴肅げんしゆくにしてゐました。

江戸城の方では、徳川一門の三卿さんしやうをはじめ、江戸にゐる大名も小名もほとんどのこらず登城をしました。いづれも晴れの登城ですから、お供の侍さむらいも、みんなきちんとかたちをととのへて、下馬先にひかへてゐました。その大ぜいのお供の侍が、御殿の方に何か非常なさわぎが起つたといふので、青くなつてさわぎでしたのです。ある者はあわてて城の御門の方へかけつけて行きました。ある者は、とりのぼせたやうになつて、ただがやがやさわぎ立てて、おたがひに何をいつてゐるのか、何をしてゐるのか、わからないやうになつてゐました。

『けんくわにしても、又傷にしても、とにかくえらいことになりました。何にしても、はやくやうすが知りたいものです。』

『さうです、さうです。御主人様にかぎつて、さやうなまちがひはない

とは信じますが。』

『いやいや、それが時のひようして、どんなまちがひがないともいへません。』

『まつたくです。何しても、はやくやうすが……。』

めいめい、そんなことをくりかへして、あたかも、蜂が巢をこはされたやうな有様でした。

播磨國、赤穂五萬石の城主、淺野内匠頭のお側用人片岡源五右衛門(三十一)も、主人のお供頭として、大手門の方の下馬先に來てをりました。そして、お城の御殿の非常なさわぎのうはさを聞くと、はつと、胸ををどらせて、もしや御主人のお身の上ではないかと、思ひあたることがありました。

源五右衛門は、誰よりも先きに、大手門のところへかけつけました。

すると、門の戸がぴたりとしまつてゐました。それが、不思議なほどいかめしく見えました。

『これは、いよいよ一大事だ。』

と、思ひましたが、誰にも聞くことも出来ません。源五右衛門は、ますます氣が氣であります。その時はもう、諸大名の家來たちも大ぜい、ばらばら、ばらばら、蜘蛛の子のやうになつて、大手門へおしよせて來ました。

源五右衛門はその人ごみをおし分けて、いつたん下馬先へ引返しました。そして、内匠頭の副馬を曳き出して、それにひらりとまたがつて、一鞭あてて城の外をまはつて、櫻田門の方へかけつけました。

しかし、櫻田門の扉とびらもびたりとしまつてをりました。

「ああ、こりや、ひよつとすると、御主人があまの吉良上野介殿と……。」

源五右衛門の胸には、主人内匠頭、吉良上野介との間に、何か事があつたのではないかといふ心配が、雲のやうにわき起つて來ました。

「屏風びやうぶの一件もある、疊たたみがへのこともある。がまんが出來なくなつて、日頃の短氣をお出しになつたかも知れぬ。」

源五右衛門は、大いそぎで、また大手の下馬先へ引返して來ました。

吉良上野介は、今度の勅使と院使との饗應役の指圖さしづ役やくでした。内匠頭は、勅使の饗應役でした。この饗應役には、いろいろむづかしい禮儀作法がありました。内匠頭ら、饗應の役についた人は、その禮儀作法をよ

く知りませんでした。それで萬事上野介に教はつて、働くことになつてゐました。

ところが上野介は慾よくが深くて、意地の悪い人でした。それでたくさんにお禮を持つて來た人には、よく教へましたが、お禮のすくないものには、よく教へなかつたばかりか、何かしくじりをさせて、恥はぢをかかせようとしてました。

内匠頭の江戸の邸には、安井彦右衛門と藤井又左衛門といふ家老がをりました。二人ともに考へが淺くて、大それけちな人でした。それで、上野介へのお禮をけんやくして、わづかの物しか持つて行きませんでした。

上野介は、おもしろくありません。



「内匠頭は、大名のうちでも金持の方だ。それにこればかりのお禮か。田舎者め、おぼえてゐろ。」

12

と、そしらぬ顔で、うんといぢめてやらうと考へてゐました。

内匠頭は、上野介にそんな考へがあらうとは夢にも知りません。で、まづ、饗應の支度として、十一日に傳奏屋敷(勅使、院使の旅館)の書院(座敷)へ、狩野法眼元信のかいた龍虎の墨繪の屏風を立てならべておきました。

すると上野介は、

『誰がこんな物を持つて來たのです。今度のやうな御大禮に、墨繪の屏風を立てるとは、とんでもないことだ。』

と、口ぎたなくののしりました。

そこへ内匠頭がやつて來て、

『御老中土屋相摸守殿から御注意もございまして、金屏風よりは、この方がよいかと存じて、これにいたしましたのでございます。』

と、いひました。

『ふん、さやうか。それならば、相摸守殿からお指圖を受けられたがよい。上野介は何もいはぬ。勝手になさい。』

と、いつて、上野介はぷいと向かふの方へ行つてしまひました。

内匠頭は、かつとなりました。

『おのれ、四位少將の位を鼻にかけて、わしを侮辱するな。くやしさて身體がふるふるほどでしたが、場所を考へてじつところへてしまひました。』

13

するとまた、その日の夕刻のことでした。家來の一人があわただしく
歸つて來てから申しました。

『伊達左京亮殿の方では、上野介殿のお指圖で、お寺のお疊がへをなさ
るさうでございます。』

伊達左京亮は、内匠頭の相役でした。そして、院使の方の饗應役にあ
たつてゐました。

『はて、をかしいぞ。こつちにはさういふ指圖はないが。』

と、源五右衛門らは、すぐに左京亮の方へ、そのことをたしかめにや
りますと、やはり、「上野介殿の指圖で、疊がへをいたしました」といふ
返事でした。

『いよいよをかしいぞ。御院使の方でさへ、お疊がへがあるのに、御勅

使の方にお疊がへのないわけはない。とにかく御主人に申上げよう。』

と、そのことを内匠頭の耳に入れました。

内匠頭は、見る見る額に青すぢを立てました。そして、

『むむ、上野介め。何か考へがあつて、わしに恥辱をあたへようとする
のだな。たぶん明日は幕府役人衆の下檢分もあらう。たとへ何ほどの費
用がかかつてもかまはん。今夜のうちにつきり疊がへをしてしまへ。』

と、はげしく命令しました。

その疊がへをする寺は、増上寺の下寺の觀智院でした。

勅使と院使は、十二日十三日十四日の江戸城の儀式がをはると、十五
日に上野の寛永寺と芝の増上寺へ參詣されることになつてゐました。そ
して觀智院が勅使の休息所にあてられてゐたのでした。それで内匠頭は

あらかじめ上野介に「観智院の方はいかがいたしませう」と、たづねたのでした。

すると 上野介は、無雑作に、

『障子壁しょうじかべなどが破れてゐたらつくろつたらいいでせう。畳は破れてさへゐなかつたなら、そのままにしておきなさい。』

と、はつきりとさういひました。これは、「お前のやうなけちなやつはさうしておくさ」といふ意味でした。

しかし内匠頭は、まじめに上野介の言葉を信じてゐました。ところが、左京亮の方へは「御院使の御休息なさるところは畳がへをなさらんといけません」と、親切に指圖がしてありました。

内匠頭は、屏風びやうぶのことでこつびどくきめつけられた上に、また畳がへのごとでしくじらせようとする、上野介の卑劣ひれつなしかたがわかつてくると、怒いかりと憎にくみとで胸が一ぱいになつてきました。しかし大切な役目を考へて、じつところへてをりました。

家來たちにも、内匠頭のそのくるしい心もちが、よくわかつてゐました。

『どうかして、こんどのお役目が、無事にすめばよいが。』

と、内匠頭の家來は、みんなそう思つて心をいためてをりました。さうして、内匠頭が、無事にお城から歸つて來るのを見ては、ほつと胸をなでおろしてゐました。

しかし、さいはひに畳がへもやつとまにあひました。そして十二日十三日と二日の饗應は無事にすみました。

その重くるしい心配のある矢先へ、お城の御殿に非常なさわぎが起つたと聞いたのです。

さて馬を飛ばして源五右衛門が、大手の下馬先まで引返へして來ますと、ちやうどその時、お目附めつけ（江戸城の役人）の多門傳八郎たかどてんが、大きな松の板にかう書いて出しました。

浅野内匠頭儀、吉良上野介へ刃傷けんじょうに及び候につき、兩人共殿中において、御糺おんただし中に候。諸供方しよともがた、騒動さわどう致すまじきものなり。

源五右衛門はそれを見ると、はつとして、

『やや、御主人は、やつぱり上野介をお斬りなされたか。ああ大へんなことになつた。』

と、一時茫然ぼうぜんとしてみました。しかし、すぐに氣をとりなほして、またひらりと馬にまたがつて、いつさんに傳奏屋敷でんそうやしきへ歸りました。そしてさらさらと筆を走らせて、赤穂の城代家老大石内藏助おほいしのすけにあてて、内匠頭が江戸城の殿中で上野介を斬つた由を手紙にかきました。

そこに、早見藤左衛門と萱野三平かんのとがゐりました。どちらも、後に義士の仲間に加はつた人です。

『御苦勞ながらお二人で、これを持ってすぐに赤穂へおいで下さいませんか。』

と、源五右衛門は二人にたのみました。

『承知いたしました。』

と、二人は家へも歸らず、そのまますぐに早駕籠はやかごで出發しました。そ

して江戸から赤穂まで、およそ七百キロの道を、夜晝通して駕籠を飛ばして行きました。それでもその頃は、五日かからなければ赤穂へ行きつかれないのでした。

將軍綱吉は、大切な大禮の式場を血でけがされたといふので、ぶんぶんおこつてゐました。

役人の多門傳八郎や久留十左衛門、大久保權右衛門などは、内匠頭と上野介とを、それぞれに一應とりしらべました。

内匠頭は、「上野介にうらみがあつて、前後をわすれて斬つてしまつた。」と、正直にいひました。そして靜かに落ちついてゐました。

上野介は、「私は老人です。うらみをうけるやうなおぼえは少しもあ

りません。たぶん内匠頭が氣がくるつたのでせう。」と、嘘をいつて、ごまかしました。そして斬られたところをおさへて、ぶるぶるふるへてゐました。

そのじつ、その日も上野介はいろいろ内匠頭をまごつかせたり、ののしつたりして、大ぜいの前ではづかしめたのでした。そして松の廊下で肩先きと額とを斬られたのでした。もし梶川與三兵衛といふ大力の旗本が、内匠頭をうしろからむんづと抱きとめなかつたならば、上野介はそこで血だらけになつて死んでしまふところでした。

將軍綱吉は、一應とりしらべがすむと、どちらがよいとか、どちらが悪いとか、そんなことを考へようとしませんでした。どういふ理由であつても「斬つた方が悪い。今日の大切な日を何と思つてゐる。」と、一圖

に思ひました。そして老中秋元但馬守と稻葉丹後守とをよんで、きつと申しつけました。

『氣がくるふたにせよ、うらみがあるにせよ、内匠頭の刃傷は天朝(朝廷)を輕んじ、公儀(幕府)をはばからぬ所業であるぞ。切腹を申つけい。また上野介が、手向かひをしなかつたのは、今日の場合ことに感心である。よく瘻の手當をさせるがよい。』

これで内匠頭の罪も處分もきまつてしまひました。さうして田村右京太夫にあづけられて、その邸で腹を切ることになりました。

二 内匠頭の切腹

風さそふ、花よりはまた我はなほ

春の名残をいかにとやせん

これは、内匠頭が切腹の座について詠んだ辭世の歌です。この時、多くの家來のうち、片岡源五右衛門だけただ一人ゆるされて、内匠頭に最後の別れをいたしました。

下總佐倉城主戸田能登守は、内匠頭の代りとして、勅使饗應の役になりました。まもなく内匠頭の家來に、傳奏屋敷を引きはらへとの命令が下りました。原惣右衛門と堀部安兵衛とは、すぐに多くの足輕を指圖して、膳椀皿小鉢銚子盃など、饗應の道具を手に手に持たせて、運び出さ

せました。足輕はずらりと二列になつて、手から手に道具をうつし、道ミチ三河岸まで手送りにしました。そして、そこから船で鐵砲洲てつぱうすの屋敷へ引きあげて行きました。その引きあげかたが、じつにきびんで、一条みだれずきちんととのつてみました。それを見た人は、

『主君の大事にのぞんで、いささかもあわてた様子が見られぬとは、さてもえらいものだ。』

といつて感心しました。かうして内匠頭の家來は、戸田能登守の家來と入れかはりになりました。

内匠頭は、その日の三時ごろ、芝愛宕下あたごの田村右京太夫の屋敷へ送りこまれました。駕籠かごには網をかけ、錠ぎょうがおろしてありました。駕籠の前後は右京太夫の家來が、嚴重にまもつてみました。

右京太夫の屋敷では、一室を板でとりかこんで、そこへ内匠頭を入れました。もう重い罪人のとりあつかひでした。しかも右京太夫は、出来るだけ親切にしました。一汁五菜じちごさいの料理で、御膳もすすめました。自分もその室にやつて来て、いろいろなぐさめて行きました。

内匠頭は、それから何時間ののちには、腹を切らなければならぬことを知つてみました。ふだんのとほりに落ちついて、箸はしをとりあげました。そして御飯を、お湯漬ゆづけにして二椀わんまでかへて食べました。しかし家來の者などへ、短い手紙をやることもゆるされませんでした。

やがて江戸城から、莊田下總守しょうだしもふさのかみに多門傳八郎と、大久保權右衛門とをそへて、三人が切腹檢分の使にやつて来ました。

この使は、將軍の代理も同様ですから、右京太夫はうやうやしく玄關

まで出むかへて、それから廣書院ひろしょみんへみちびきました。

『お預けの浅野内匠頭へ、切腹を仰せつけられます。さつそくお支度をなさい。』

と、下總守はいひました。

『承知いたしました。』

右京太夫はさうこたへて、すぐに家來に命じて、それぞれ支度にとりかからせました。

『かんじんの切腹の場所はどこですか。一應検分しませう。』

と、傳八郎は、役目ですから、まづその場所を見ておかうといひました。權右衛門も賛成しました。

『いや、それには及びますまい。私は、繪圖面でもう検分しておきまし

た。あらためて見られる必要もないでせう。』

と、下總守は、「お前たちがべつに見んでもいいぢやないか」といふやうにいひました。

傳八郎は上役の人のいふことといへば、何でもはいはいといつてゐるやうな、意氣地なしではありませんでした。りつばな侍の魂のある人でした。

『あなたは御檢分になつたかも知らないが、私たちはちつとも様子を知りません。後に手落になるやうなことがあつては困ります。見ておきませう。』

と、ぐわんばりました。

下總守はさつと顔色をかへて、聲をとがらせました。

『私は正使ですぞ。差副さしそへのあなたからお指圖は受けん。もつともあなたはお目附めつけだから、そのお役で見られるなら、勝手に見られるがいい。その代り老中へは、めいめい報告することにしませう。』

『よろしうございます。さういたしませう。大久保氏、ごいつしよに見てまゐらうではありませんか。』

と、傳八郎は一步もゆづらず、權右衛門と一しよに、内匠頭が切腹する場所を見に行きました。

案内されて行きますと、そこは小書院の方の庭でした。

そこに、白縁びやくをとつた疊を九疊ほどしいて、まはりには幕を張りまはし、雨障子を屋根のやうにしてありました。つまり内匠頭は、野天で腹を切らせられるのでした。

『けしからんことだ。』

と、傳八郎は思ひました。そして、右京太夫に向かつて、

『この場所は、あなたから下總守殿へおうかがひになつて、きめられたのですか。それとも下總守殿のお指圖ですか。』

と、ふんがいしてたづねました。

『これは一たん下總守殿へ繪圖面をもつて、おうかがひいたしまして、お指圖をうけたのでございます。』

右京太夫は、少し機嫌きげんを悪くして答へました。

『さうですか。しかしあなたも、お考へになるがよろしい。内匠頭は、一城の主、五位の諸太夫、五萬石の大名ですぞ。たとへ不届ふとせきがあつても切腹は仰せつけられても、官位官職は召上げられません。浅野内匠頭長

矩として、切腹させられるのです。それを、庭先で切腹させようとなさるのは、何事です。内匠頭の身分相当のおとりあつかひをなさらなければなりませんまい。』

と、傳八郎は道理でおして、右京太夫をやつつけました。

右京太夫も、なるほどさうだと気がつきましたが、もう晩方で、切腹の刻限がせまつて來てゐるので、今更どうすることも出来ません。で、ひどくこまつた顔をしてゐますと、傳八郎はふいとそこを去つて、つかつかと下總守のところへやつて來ました。

『ただ今、切腹の場所を見てまゐりましたが、あれはどうしたのです。

内匠頭は、庭先で切腹させるやうな罪人ではないでせう。あんなことをなさいますとは、後にわれわれのもの笑ひになりはしませんか。』

『いや、御心配なさるな。私は正使として責任を持つてゐます。』

と、下總守も意地をはつて、きつばりはねつけました。

『しかし、内匠頭の身分をお考へにならないと、いけないでせう。』

權右衛門は、やつきとなつていひました。

『内匠頭は罪人です。』

『たとへ罪人でも大名です。』

いつたい、傳八郎は、目附役として、お城で内匠頭をとりしらべたのでした。そして内匠頭が、上野介を斬つたのは、よくよくがまんが出来なかつたからであらうと察して、大そう同情したのでした。それで「内匠頭は、その日のうちに、切腹させよ」といふ命令が下ると、上の役人に向かつて「かるはづみで、不公平なおさばきである」といつて、正面

から苦情をとなへました。

上の役人たちもいかにも道理であると、いろいろ相談もして見ましたが、何といつても、將軍がちきぢきに老中にいひつけたことですから、誰の力にも、どうすることも出来ませんでした。

その傳八郎です。場合によつては、自分も切腹するかくごがありました。勇氣と同情と、そして正義を愛する心とが、火のやうに體ぢゆうに燃えてゐました。

「いや、大名でも、その日のうちに切腹させられるやうな者は、庭さきでやらせてたくさんです。」

と、下總守は、ぶりぶりして怒りだしました。

「いやいや、罪人でも内匠頭は、武士の意地で、けんくわの相手を斬つ

たといふだけです。お上でもいくらか、御慈悲をかけられなければなりません。ことに本家は、安藝五十萬石の大大名ですぞ。」

傳八郎は眼をぎらぎら光らせました。

「わしは、あんたの指圖はうけんぞ。いふことがあれば、後に老中へ申上げるがよろしい。」

「もちろんです。しかしさしあたつて……。」

傳八郎は、まつ赤になつて、どこどこまでもあらそはうとします。いよいよ大げんくわにならうとした時、右京太夫が、あわただしくそこへやつて來ました。

「申上げます。ただ今、淺野内匠頭の家來、片岡源五右衛門と申す者がまゐりまして、一目なりとも、主人の姿を見て、最後のわかれがしたい

と申します。もちろん、いくたびかことわりましたが、なかなか聞入れません。この上ことわりますと、何をするか知れぬいきほひでございませう。いかがいたしませう。』

と、大そうこまつた様子で申しました。

下總守はけんくわをして、かんかんになつてゐるところでしたから、『それくらゐのことは、わしに聞かれないでも……。』

と、いつたきり、横を向いてしまひました。そして、許すとも、いけないともいひませんでした。

傳八郎は、どうせ上役の人とあらそつたのだ、明日は役をやめればいと決心して、

『武士の情けだ、ゆるすがよろしい。この傳八郎が、聞きとどけるぞ。』

もつとも、ちきぢきにはいけません。内匠頭が切腹の場所へ出る時、間をおいて、それとなくおあはせなさい。』

と、きつぱりといつて、さて、下總守の方に向かつて、

『あなたは、どうお考へになりますか。』

と、たづねました。

『御勝手になさい。』

下總守はふりむきもしません。

『よろしい、ゆるす。』

と、傳八郎は もう一度右京太夫に、安心させるやうにいひきりました。た。

右京太夫は玄關の方へ出て行つて、源五右衛門に「多門傳八郎殿の情

けて、よそながらあはせる」と、申しわたしました。そして、源五右衛門の脇差までもあづかり、小書院のそばの庭へ案内させて、そこにひかえさせておきました。源五右衛門はそれさへも、傳八郎の格別のはからひと思つて、大そうその親切をよろこびました。するうちに、一刻々と時がすすみました。日は西にかたむいて樹の影は長くなり、春の庭は静かでした。

右京太夫は、板がこひのしてある一室へまゐりました。そして、廣蓋ひろがさ（衣服を入れる箱）にのせた袴かみしもを、内匠頭の前に置いて申しました。

『大目附莊田下總守殿、お目附多門傳八郎殿、大久保權右衛門殿、上使としておいてございます。おいひわたしがありませんから、衣服を改め

て、さつそくおいで願ひます。』

『承知いたしました。』

と、内匠頭は、手ばやく一人で着物を着かへ、袴をつけて、しづしづと大廣間へ出て行きました。そして、づつと末席の方にさがつて、うやうやしく両手をついて、頭を下げました。それは上使といふお役に對する禮儀でした。

莊田下總守をまん中に、傳八郎は左に、權右衛門は右に座をとつて、三人は儼然げんぜんとして、上使の威嚴ゐげんをつくつてみました。もうおたがひにまつ赤になつていがみあはうとはしませんでした。

『その方儀……。』

下總守は重々しく口を切りました。

『今日、殿中において、御場所がらをもわきまへず、わたくしの意趣を以て、吉良上野介を刃傷に及び候段、重々ふとどきに思召され、切腹仰せつけらるるものなり。』

この言葉は、つまり將軍の言葉でした。

内匠頭は、また、うやうやしく頭を下げました。

『かしこまつてござります。今日の次第、長矩、今更何とも、申上げやうもございません。お慈悲を以て、切腹を仰せつけ下さいまして、ありがたく存じます。各々様にも、檢使としてお立會の役、御苦勞千萬に存じます。』

顔色も變へません。言葉も靜かに、はつきりしてゐましたが、内匠頭は上野介を討止めなかつたことが、氣にかかつてなりません。そ

れが、この世に残るただ一つの氣がかりとして、心の底にむらむらしてゐました。

『おうかがひいたしますが、上野介殿は如何になりましたか。』

と、内匠頭は少し頭を上げて、下總守にたづねました。

『吉良殿でござりますか……』と、下總守は冷淡に、『痕のお手當を受けて、お城から引き取りました。』

内匠頭はがっかりして、ちよつと眼を伏せました。そして今度は、傳八郎の方に向かつて、

『お目附には、たぶん御覽になつたことと存じますが、わたくしが斬りつけましたのは、たしかに二ヶ所と存じますが、如何でございましたらう。』

『さうです。たしかに二ヶ所でした。』

傳八郎は言葉に力をこめていひました。

『それに、^瘻瘻は大して深くはなかつたが、何といつても急所です。ことに老年ですから、痛みもひどいでせう。』

と、権右衛門も、いかにも重態であるやうにいひました。

『まづ、なほるかどうか、わかりませんな。』

二人のお目附傳八郎と権右衛門とが、かはるがはるかういつたので、内匠頭はすつかり安心してしまひました。あんまりうれしかつたので、ついほろりと涙を落しました。

『ありがとうございました。』

内匠頭は、二人に禮をいつて、心がはれられたやうにつこり笑ひ

ました。そして、

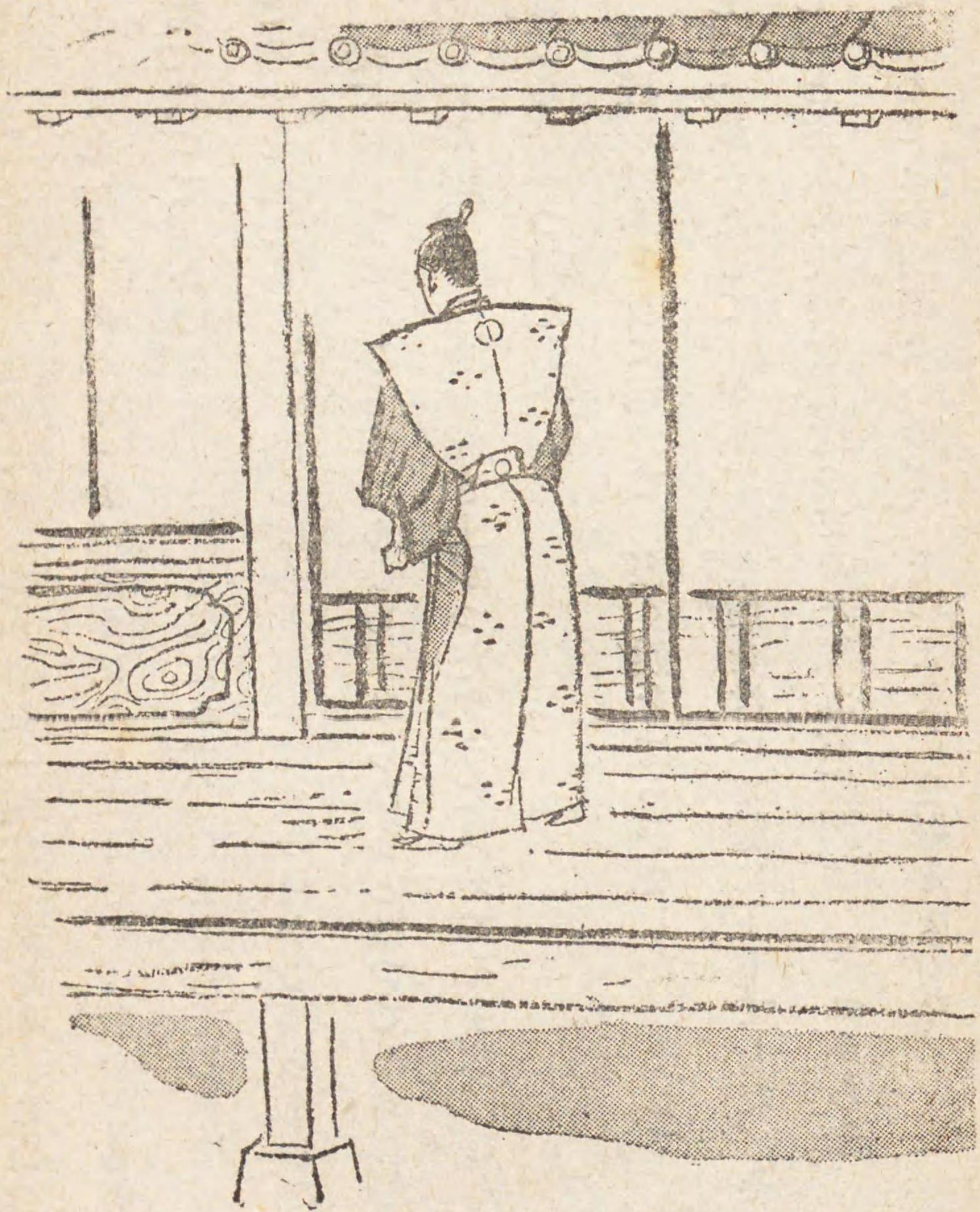
『では、どうぞお場所へ（切腹の）御案内を願ひます。』

と、静かにいひました。その様子は、白の燕子花かきつばたが水にうつつたやうにいさぎよく見えました。

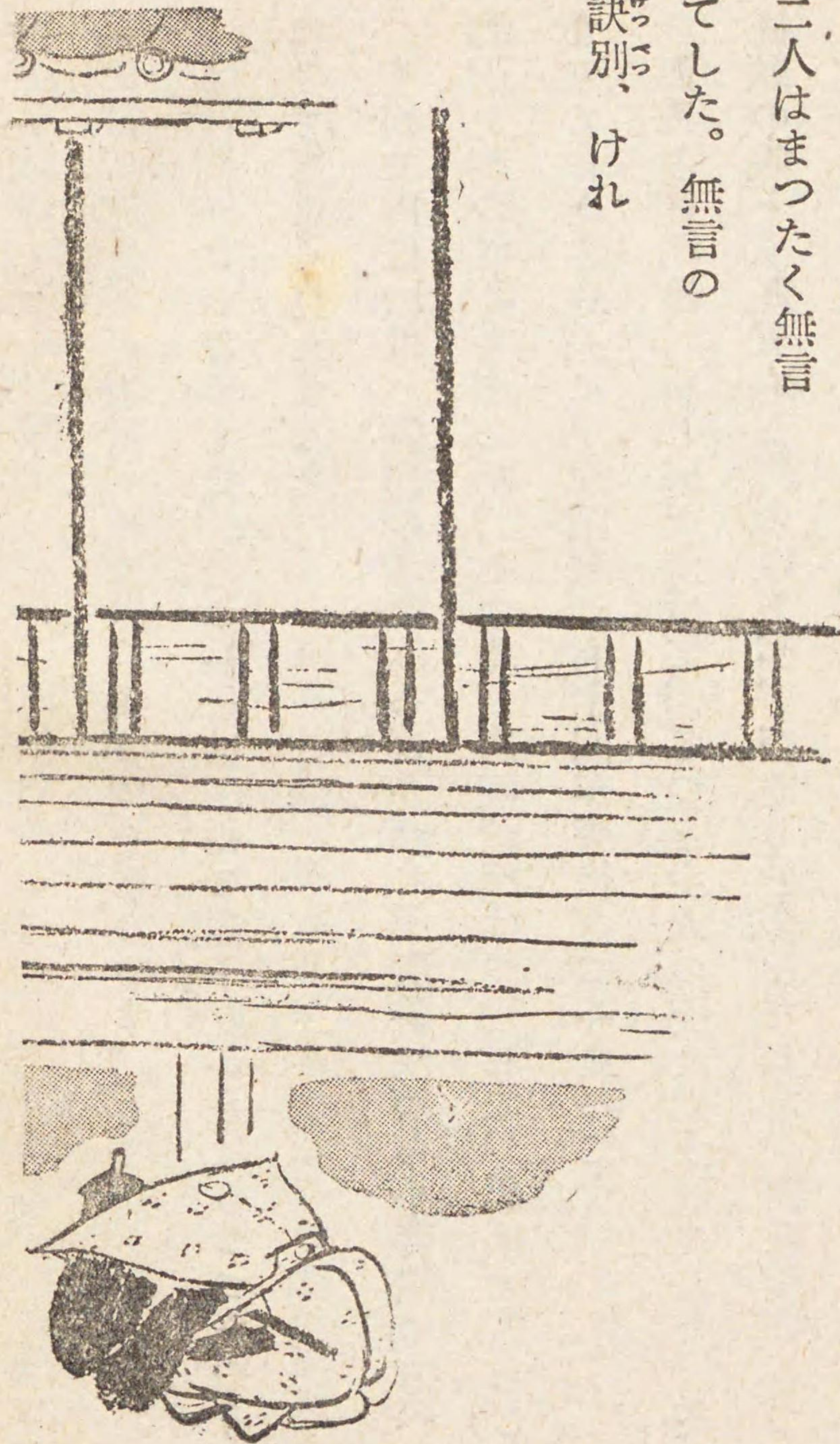
やがて内匠頭は、案内の者にみちびかれて、廣書院から小書院の方へ廊下を渡つて行きました。その時、内匠頭ははつとして、思はず立ちどまりました。庭先に、片岡源五右衛門が平伏してゐたのです。

源五右衛門は、少し頭を上げて、じつと主人の姿を見上げました。内匠頭の眼と、源五右衛門の眼とが、びたりと合ひました。内匠頭は、つかつかと二歩三步、廊下の端まで出ました。

しかし、「おお、よく来てくれた」と、いふことも出来ません。源五右



衛門も、少し前へにじり出ましたが、これも「さぞ御無念でございませ
う」ともいはれませぬ。
二人はまつたく無言
でした。無言の
訣別、けれ



ども、眼と眼、心と心が、たがひに「無念であるぞ。この無念は晴らしてくれ」と、いへば、「お心静かにおいで下さい。我々どもが、きつと君に代つて、かの敵を……」とこたへて、口よりもたしかに、その「ころ」を交しました。はらはらと涙が二人の目から落ちました。

庭には、櫻の花びらがひらひら、ひらひらと散つてみました。切腹場の白い幕が、くつきり浮き上がつたやうに見えてみます。しんとして、咳ばらひ一つ聞えませんが。

内匠頭はふと我に返つて、軽く涙をはらひました。そして、またしづしづと歩みだして、やがて福草履をはいて庭に下りました。その時までじつと主人の後姿を見送つてゐた源五右衛門は、それから先、もうそこにゐることが出来ないので、そつとそこを退きました。

内匠頭は切腹場の席につきました。

三人の上使も切腹場の近くに席をつくらせて、それへ出て來ました。つづいて右京太夫の中小姓が、「腹切刀」——九寸五分を三寶さんぼうにのせて、それを捧げてすすみました。

三寶は内匠頭の前におかれました。あたりは水を打つたやうに、しんとしました。

「御上使の方々に、願ひがございます。」

ふと、内匠頭は、かう呼びかけました。

上使三人の眼は、一しよに内匠頭の顔にそそがれました。

「わたくし、差料さしれうの刀、たぶん御當家におあづかりのことと存じます。

わたくし介錯かいしゃくは、相成るべくは、その刀で願ひしたいと存じますが、

如何でございませうか。また、そのおゆるしがございましたら、その刀は、介錯をなさる方に、かたみとして差上げたいと存じます。』

下總守は、じつと耳をかたむけておりましたが、すぐにはいいとも悪いとも、いひませんでした。

『貴殿らは、どう考へられる。』と傳八郎たちに向かつてたづねました。『願ひのとほり聞きとどけませう。』

傳八郎と權右衛門が、口をそろへてこたへたので、
『では、その刀をとりよせるがよろしい。』
と、下總守は、それをゆるしました。

内匠頭がかういふことを願ひ出たのは、上野介を斬りそこなつたのは自分の刀の切れ味が、悪かつたのではない、まったく梶川與三兵衛にだきとめられたからだといふ證據を、見せようといふ考へもあつたのでせう。

さて内匠頭は、硯箱をかりて、「小菊」といふ鼻紙へ、辭世の歌をかきました。「風さそふ花よりも」といふ、あの歌であります。その辭世の歌は、右京太夫にわたされました。

そこへ右京太夫の家來が、内匠頭の刀を持つて來ました。傳八郎は、一應あらためて見て、それを介錯人の磯田武太夫にわたしました。武太夫は、お城から三人について來た者でした。

介錯といふのは、腹を切つた者の首を打ち落すことですが、なかなかむづかしいことで、よほど腕がきいておないと、やりそこなひます。たがい腹を切る者が、腹切刀を腹へあてると同時に、ぼんと首を打ち落

してしまふのですが、時によつては、三寶をいただくとすぐに、首を落
してしまふこともありました。つまり、腹を切る者に、苦しみをさせな
いのが、慈悲としてあり、見ぐるしく腹から血を出させないのが、首を
斬る者の手際としてありました。

内匠頭は、上使に目禮して、袴の上を前だけはづして、肌をくつろげ
ました。

次に、三寶をおしいただいて、腹切刀を手に取りました。

武太夫は内匠頭のうしろにまはつて、その呼吸をはかりました。彼は
袴の上を肌ぬぎのやうにはづして、小袖に襷をかけ、袴をきりりとたく
しあげてみました。

内匠頭は、腹切刀をとりなほしました。刀は奉書紙で元の方をきりき

りまいて、切尖の方が少しきらりと出てゐるばかりでした。

上使も、多くの警固の侍も、息をこらして、そよりと風の音もしませ
ん。ただ櫻の花びらが、ひらひら、ひらひらと散つてみました。

内匠頭は、水のすみきつたやうな身がまへです。腹切刀を左の腹へ突
き立てようとして、その切尖が、腹にふれたかと思つた時、武太夫の聲
が、

「やつ。」

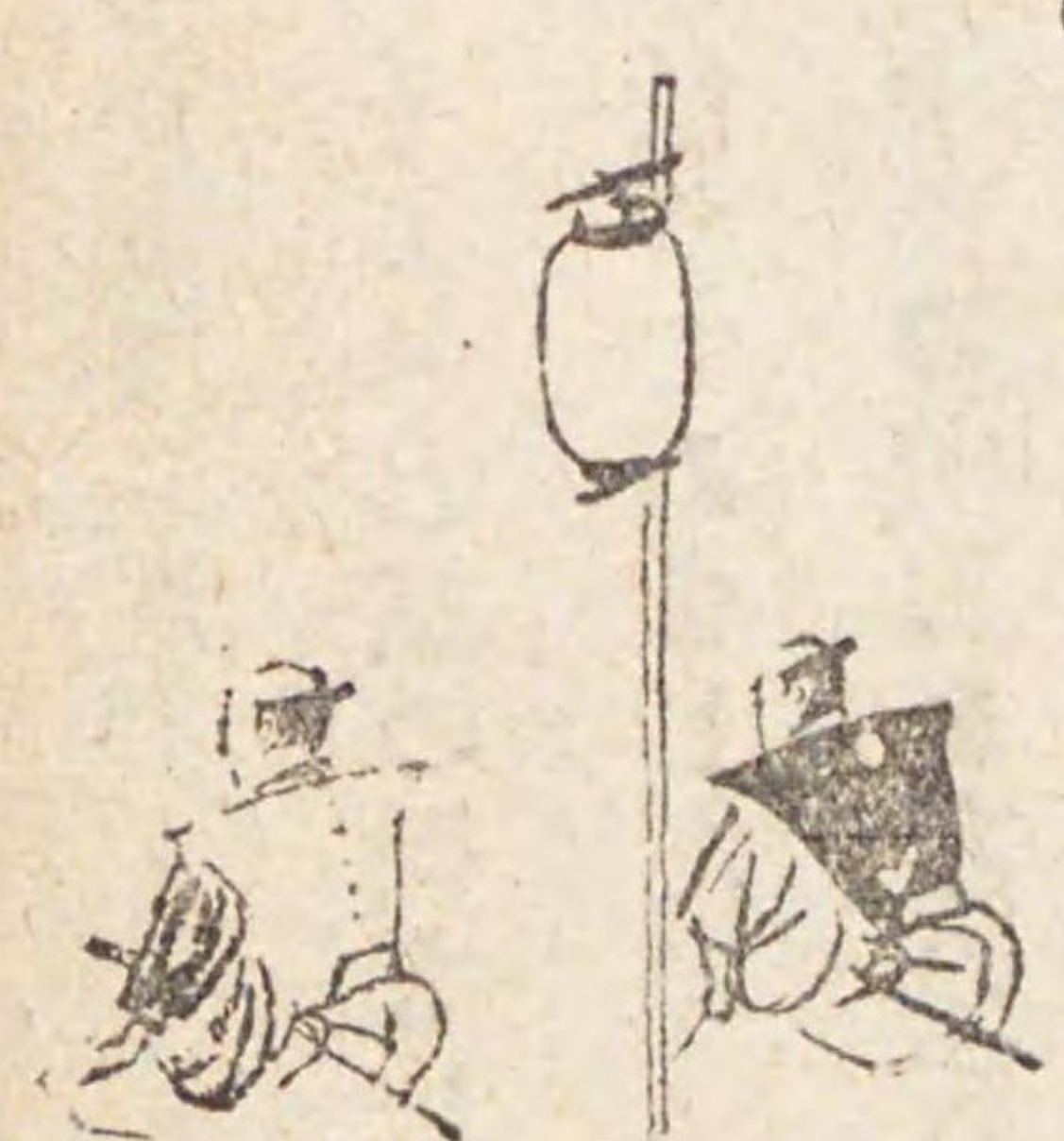
と、かかりました。刀がひらめいて、内匠頭の首は、もう前に落ちて
身體はくづれるやうに、のめりました。

武太夫は首をとりあげて、上使の方へさしむけて見せました。

下總守は扇をひらいて、顔をおしあてるやうにして、たしかに見とど

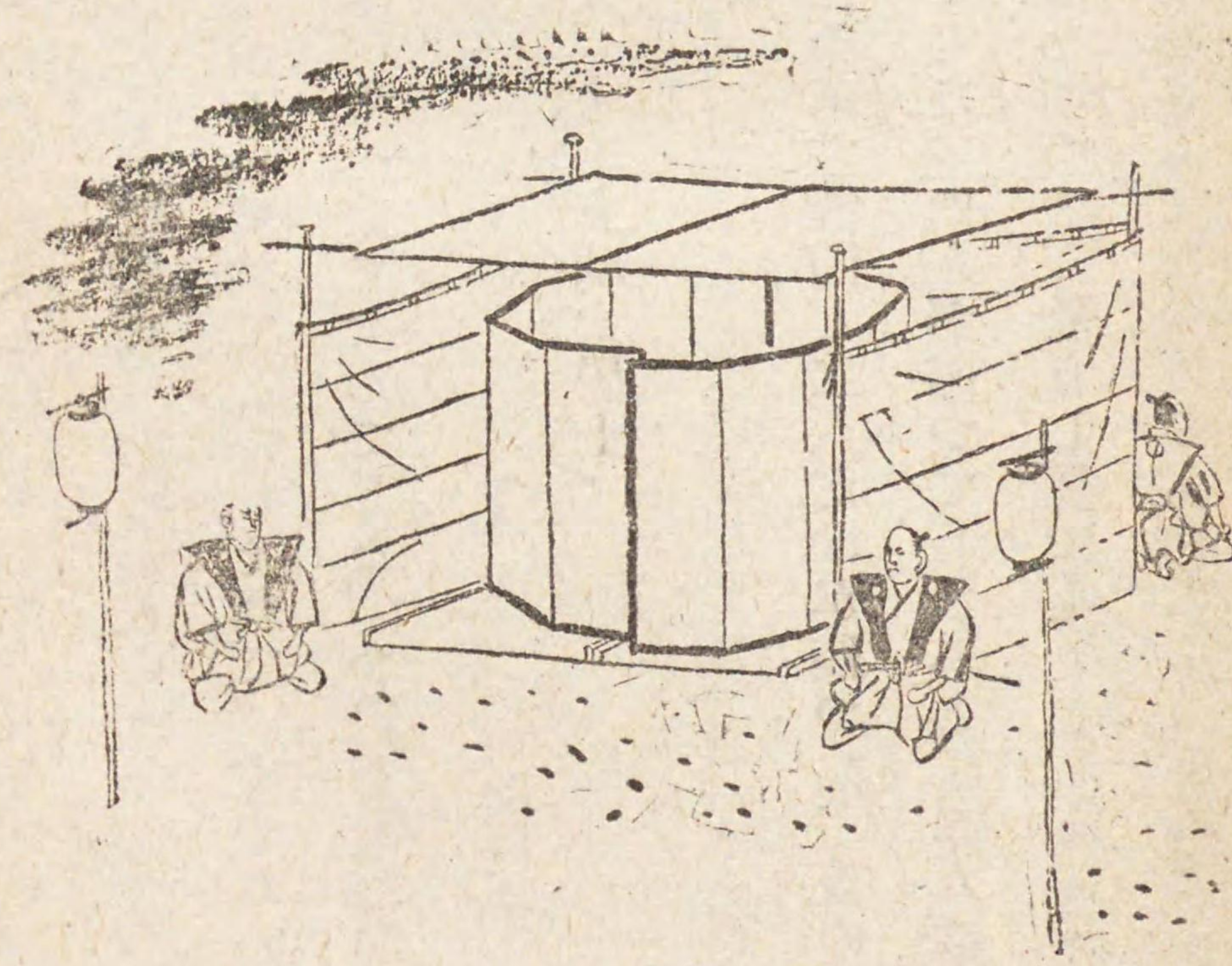
けた、といつて、つつと立ち上りました。傳八郎も權右衛門も席をはなれて、内匠頭の死骸に目禮しました。そして三人の上使は、お城へ引上げて行きました。

日が暮れました。白張の屏風を引きまはしたなかに、白布の蒲團をか
けられて、内匠頭の死骸は、ひややかによこたはつてゐました。そこに
は、多くの高張提灯を立てつらねて、大ぜいの
徒士や足輕が、しゆく然と死骸をまもつ
てゐました。空には、春の星が美しく
輝いてゐます。しかし内匠頭は、首
と身體と二つになつて、その命は



もう、この世から消えてしま
つてゐました。年は三十歳
でした。

まもなく、右京太夫の知
らせを受けて、内匠頭の家
來粕谷勘左衛門、建部喜六
片岡源五右衛門、磯貝十郎
左衛門、田中貞四郎、中村
清右衛門の六人が、内匠頭
の死骸を引きとりに來まし
た。六人は、變りはてた主人



の死骸を見て、泣く泣く棺くわんに取りをさめました。そして六人だけで、菩ぼ提所たいしよ、芝、高輪たかぎわの泉岳寺せんがくじに葬はうむりに行きました。むろん夜のうちにとり行つてしまふといふほど、哀あはれな淋さびしい葬式さうしきでした。それで、家老の安井彦右衛門、藤井又左衛門なども、寺へ來ませんでした。お經を讀む坊さんぼくさんも、わづか三四人でした。

冷光院殿れいこうゐんてん 前少將さきの 朝散太夫あささんたいふ 吹毛玄利大居士すゑもろげんりだいこじ

これが内匠頭の法號ほうごうでした。

葬式がすむと、源五右衛門と十郎左衛門と二人だけが残つて、後の四人はそこそこに歸つてしまひました。四人が歸つてしまふと、二人は申しあはせたやうに、ふつつり鬚まげを切つて、散らし髪かみになりました。——武士が、鬚を切るといふのは、坊さんになつたのも同じことでした。

二人は、切つた鬚まげを持つて本堂を出ました。そして、淺野家代々の墓所のところへ行きました。そこには、今しがた内匠頭ないまがらの骸むせがらを埋めたばかりの土が盛り上つてゐました。二人は、そのそばに切つた鬚まげを埋めました。

『御敵かたぎは上野介……。かならず、上野介の首を斬つて御墓前にそなへます。』

二人は言葉をそろへて、さう誓ちかを立てて、またはらはらと涙を落しました。春の月は、おぼろにかすんで、そこらにはうすい影が出來てゐました。

『今日の様子で見ても、江戸家老は二人とも、話相手になりません。折を見て赤穂へまゐりませう。』

源五右衛門は涙にしめつた聲に力をこめて、さういひました。

『さうです。大石殿は、なかなかの人物と聞いてをります。とにかく行つて、御意見を聞いて見ることにいたしませう。もしいけなければ、あなたとわたくしとが……』

と、十郎左衛門にも根強い決心がありました。

『さうです。目ざす敵は一人。ただ二人で斬りこんでも、上野めが白髪首をとれぬことはありませんまい。』

と、源五右衛門は涙をはらつて、さわやかにいひました。

『ちかひませう。』

『承知しました。』

二人は、内匠頭の墓前で、はやくも敵討のちかひを立てました。

ちやうどその頃、原惣右衛門と大石瀨左衛門とは、二番の注進としてやはり早駕籠を飛ばして、江戸を出發しました。鐵砲洲の屋敷は取上げられて、その夜のうちに引きはらふことになりました。堀部彌兵衛、堀部安兵衛、奥田孫太夫、村松喜兵衛、片岡源五衛門、磯貝十郎左衛門、富森助右衛門、赤垣源藏——いづれも後に「四十七義士」のなかに加はつた人々は、心をあはせて、引きはらひの支度をしました。さうして夜明けごろまでに、荷物をいつさい運び出して、屋敷を明けわたしてしまひました。

多くの家來は、ながらく住みなれた屋敷をはなれました。内匠頭の奥方は、麻布南部坂の實家へ引きとられました。

多門傳八郎は、お城へ引上げるとすぐに、老中土屋相摸守つちやまがみのかみにあつて、「切腹の場所が、不都合である」と、意見をのべましたが、いかげんに聞き流されてしまひました。

で、あくる十五日、權右衛門と二人で、今度は老中秋元但馬守あきもとたじまのかみに、そのことを申し出ました。但馬守は、柳澤出羽守にそのことをいひますと「もうすんでしまつたことだ。とやかういふほどのことではない」と、出羽守は冷淡に、片づけてしまひました。

下總守は得意でした。そして、傳八郎と權右衛門とに向かつて、『お上かみでは、お取上げになりませんでしたね。いや、よけいなことをなさるもんだ。』と、いつて冷笑しました。

『よけいなこととは何です。たとへお取上げにならなくても、お上のためにならないことはえんりよなく申上げる。』

と、二人は、やりかへしました。

『何ですと。』

と、下總守は怒りました。また大喧嘩にならうとしましたが、そこに居あはす人々がおしとどめて、そのまますんでしまひました。

すると、その日の午ごろひるごのことでした。内匠頭の本家、淺野安藝守あきのかみの使者が、田村右京太夫のところへまゐりました。そして、

『昨日、内匠頭ふとどきによつて、御當家で切腹を仰せつけられてまことに恐れ入りました。しかしながら、庭先で切腹いたさせられたのは、どなたのお指圖ですか。』

と、ねぢこみました。

右京太夫の方では、返事のしやうがないから、

『御上使、莊田下總守のお指圖でございます』と申しました。

そこで安藝守は、直掛合ぢきかけあひに、そのことを老中へ申し出ました。

老中でもうち捨てておくことが出来なくなりました。

あくる十六日、秋元但馬守が主となつて、若年寄の人々も列席で、下總守をはじめ、傳八郎、權右衛門を呼び出して、とりしらべがありました。

『安藝守から苦情が出た。下總守は、なぜ内匠頭を庭先などで切腹させたのか。』

と、但馬守はなじりました。昨日とは、だいぶ風向きが變つて來ました。

『恐れ入ります。まつたく、心づきませんでした。』

と、下總守はしらじらしく「知らなかつた」で通さうとしました。

傳八郎と權右衛門とは「どつこい、さうはいはさないぞ、こつちはそのことで、さんざん喧嘩をしたのだ」と、有りのままをさらけ出して、下總守の油をしぼりました。下總守は、すごすごと引きさがつて行きました。それから大そう評判が悪くなつて、とうとうその年の八月、大目附の役が免職めんしよくになりました。

なほ、片岡源五右衛門は、多門傳八郎のおかげで、たとへ一日でも、最後の内匠頭の姿を見たことを非常にありがたく思つてをりました。それで、その年の十一月二十三日に、赤穂の鹽みかげを土産みやげにもつて、傳八郎の邸しやにたづねて行きました。

そのころは、源五右衛門の身分として、直參ちきまの傳八郎にあふことは、なかなか大へんなことでした。で、取次の者に向かつて、

「主人切腹の折は、御親切なるお取なしによつて、よそながら訣別けつべつが出来ました段、いつまでかありがたく心得をりまする。うけたまはれば下總守様には御役を御免の由。こちら様にては御安泰ごあんたいにおつとめにて、恐おそ悦よろこに存じ上げまする。この鹽は、赤穂より到來のもの、恐れながら獻上けんじやうつかまつる。よろしくおとりなしを……。」

と、申しのべました。

傳八郎は、氣持のさつぱりした人でしたから、

『あうてやらう。』

といつて、座敷へ通して對面しました。そして、いろいろ話すうちに「もし、どこにか仕へる氣があるなら世話をしよう」といつたりしました。

源五右衛門は、その親切を心から感謝しました。そして、「もうふたたび主人をもつ考へはございません。來春は町人になるつもりでございませ」といつて、ことわりました。

そこへ酒肴さけあなが出て、源五右衛門は思ひもかけぬ優遇いうぐわいを受けて歸つたといふことです。

三 赤 穂 城

赤穂の城に、三月のはじめ、不思議な前兆がありました。二の丸の門の廂に、大きな大きな蜂の巢が出来て、そこに蜂合戦がありました。そして、城の方の蜂は、外から来た小蜂のために、みなごろしにされてしまひました。赤穂の人は、みんな暗い心もちになつてゐました。ところへ十八日の眞夜中、江戸から第一の注進が、内藏助のところへとどきました。

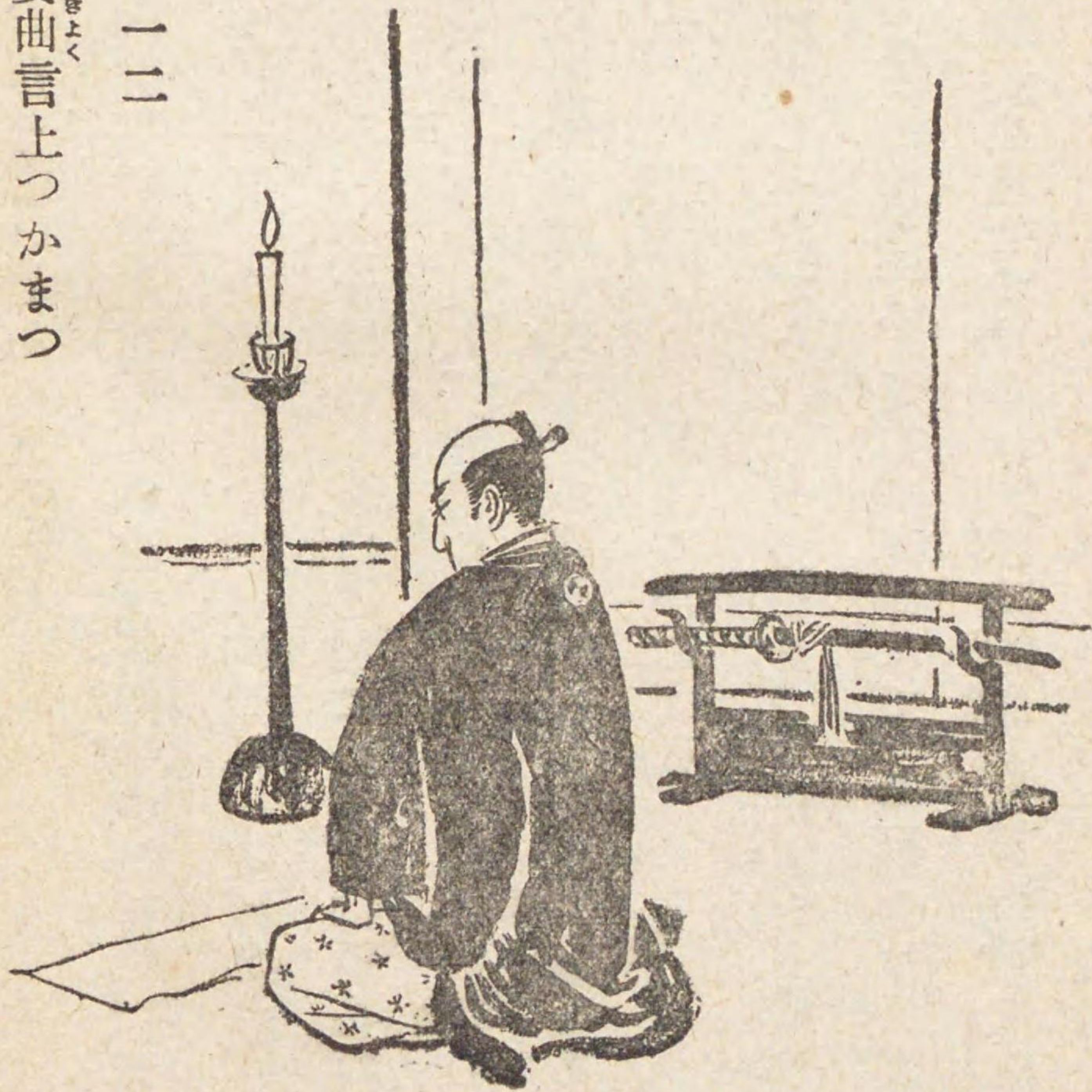
第一の注進早水藤左衛門と茅野三平とは江戸をたつてから五日目——はつきりいふと、四日と半日で赤穂へつきました。早駕籠が、城代家老大石内藏助の邸についたのは、もう眞夜中でした。

源五右衛門の書面には、かう書いてありました。

御勅使、柳原大納言様、高野中納言様、御院使清閑寺中納言様、御道中御機嫌よく、當月十一日、御到着、十二日御登城あそばされ、十三日御饗應、御能相すみ、翌十四日、お白書院に於て、御勅答の式に相成り候にて、御執事、お役人、諸侯のこらず御登城。折から松の廊下に於て、吉良上野介殿、理不盡の過言をもつて、恥辱をおたへられ、これによつて、君（内匠頭）又傷におよばる。

然るところ、梶川殿に押しへだてられ、多勢をもつて白刃をうらばひとり、吉良殿を打ちとどめ申さず、双方御存命にて、上野介は大友近江守殿へ、御介抱御養生仰せつけられ、即時鈞命（將軍の指圖）有之君は田村右京太夫へおあづけに候。傳奏饗司は、即刻戸田能登守殿

へ仰せつけられ候。
 あらまし、右の通
 りに候條、いかに
 もお家大切の時節
 に候故、御注進と
 して、早水藤左
 衛門、茅野三平
 右兩人、馳せの
 ほり申候。この日
 とりいそぎ、書中、一二
 にあたはず、兩人委曲言上つかまつ



るべく候。なほおひおひ注進し奉
 るべく候。
 恐惶謹言

三月十四日己下刻

片岡源五右衛門高房

大石内藏助様

まつたく、大へんなことが出来まし
 た。

「この様子では、御主人はたぶん、切腹を
 仰せつけられるだらう。さうしてお家を斷絶
 か……。」

と、内藏助はこの手紙を見た時、眼をつぶつ



てじつと考へました。しかし、少しもさわぎませんでした。まづ、藤左衛門と三平とに、それぞれ手當を加へました。

藤左衛門も三平も、ふつうの旅でしたら、十五日もかかるころを、わづかに四日半でついたのです。それで書面を内藏助にわたすと、がつかりして、もう正體がありませんでした。内藏助は、その晩二人を、そつとしておきました。さうしてあくる朝になつて、二人から、くはしく江戸の様子を聞いて、それから登城をして、そのことを内匠頭たくみのかみの家來一同につげました。

赤穂城内は、ひつくりかへるやうなさわぎになりました。内藏助は何ともいはずに、ただ次の注進を待つてゐました。

その日は、ごたごたしたうちにむなしく暮れてしまひました。夜の八時ごろになると、原惣右衛門と大石瀨左衛門とが、第二の注進としてやつて來ました。それで内匠頭は切腹、お家は斷絶、上野介は無事、といふことがわかりました。

内藏助も、主人は切腹、お家は滅亡ときまつては、腸はらわたがちぎれる思ひがしましたらう。けれども、かくべつひどくふさぎこむとか、または憤おこるとか、なげくとか、少しも、そんなかうふんした様子はしませんでした。ただ心配さうな顔をして、時々そつと、歎息たんそくするくらゐのことでした。さうして家の者にも、また、注進に來た四人の人にも、別に、どうするといふやうなこともいひませんでした。原惣右衛門などは、吉田忠左衛門、小野寺十内、堀部安兵衛、片岡源五右衛門らとともに、のちに四十七士のうちでも、四天王ともいはれるほどしつかりしてゐて、りつ

はに相談相手になる人物でしたが。

内藏助は、かうして沈着に、だまりこくつてみました。そして次の朝登城をして、また一同を呼びあつめて、第二の注進の次第を、くはしく告げました。

その時、あつまつた者は三百七十何人といふ大ぜいでした。そのうちには、次の家老、大野九郎兵衛や、奥野將監、進藤源四郎、小山源五右衛門、岡林奎之助、玉蟲伊左衛門、吉田忠左衛門、矢頭長助、毛利小平太、岡野金右衛門、伊藤五右衛門など、赤穂家中の、れきれき——のちの義士もまじつて、一同づらりとならんでみました。

『さて、ただ今申上げたやうな次第でございますから、このお城も、いとお召上げになるかしれません。それについて、御一同のお覺悟……、この場合、臣下の身分として、我々一同どういたしたらよろしいのでございませうか。お考へのほどを、御えんりよなくおのべになつていただきたいのです。』

内藏助は「内匠頭切腹、お家斷絶」の報告を終ると、まづさういつて大ぜいの考へをたづねました。
すると、

『なに、御主人だけ切腹なされて、相手の上野介にはおとがめがないのですと。けしからん。けんくわは兩成敗と、昔からきまつたことではありませんか。』

と、どなる者もあれば、

『これは、考へも何もあつたものではありません。今から江戸へ行つて

上野介を討ちとるまでのことです。』

と、泣いてわめく者もある。また、

『君はづかしめられるれば、臣死すといひます。我々は御主人の後を追つかけて、切腹するのが臣の道です。武士道です。』

と、ただかつとなつて、死なうといふ者もあれば、

『いやいや、我々はむだに命をすてる時でない。それよりは、この城にこもつて、今にも城を受けとる役人が来たならば、矢がつき、刀の折れるまで戦つて、いさぎよく討死するのが何よりです。』

と、やつきとなつていふ者もある。——いはゆる議論ふんぶんとしてまるで蜂の巣をたたきこはしたやうな有様でした。しかし大野九郎兵衛や、岡林奎之助、近藤源八など、身分のよい者は、大がい口をきけば損

だといふやうにだまつてをりました。

内藏助は、この様子を見てとつて「これは、とても相談がまとまらな

い」と思ひました。

さうしてその日の相談は、それきりにしてしまひました。それから二十二日に、内匠頭の弟大學が、閉門へいもんになつたといふ知らせがあつたり、引きつづいて、いろいろ知らせがあつて、二十八日には、「いよいよ近日、城を受けとる役人がそちらへ行く」といふ知らせが來ました。

内藏助は、その日また、内匠頭の家來一同を城に呼びあつめて、大ぜいの考へをまとめておかうとしました。

『近いうちに、お城を受けとりのお役人が來られることになりました。』

この間から、いろいろ御一同のお考へをうけたまはりましたが、まづ討手を引受けて、城を枕に討死しようといふ方が、多いやうで、ごもつとものお考へです。義を思ふ者は、誰もさうなくてはなりません。しかしながら、ここに一つ、よく考へて見なければならぬことがあります。それは、御主人の家のおためといふことです。今、御主人は切腹なさる。お家は斷絶いたしました。幸ひにお血すぢとして、御舎弟、大學様がおいでです。内藏助考へまするには、我々一同、お上にお願をいたしてたとへ一萬石にせよ、五千石にせよ、大學様をお取立て下さる御沙汰からむりたいと思ひます。つまり斷絶したお家を再興して、御先祖代々の祀のお絶え申さぬやうにいたします。これがさしあたつて、一番大事なことかと考へます。もちろん、もしこの願ひをお取り上げ下さらぬ

時は……そのときこそ、我々一同、城を枕に討死する時です。その時になつて、御主人の後をおしたひ申しても、決して遅くはないと思ひます。御一同のお考へは如何ですか。』

語調は低くはありましたが、言葉も理義もはつきりしてゐました。大ぜいの者も、

『さすがは、城代家老だ。考へが深い。』

と、感心しました。そして誰も「それはいけない」と、いふ者もありませんでした。

ところが、家老の大野九郎兵衛が、しぶい顔で、ずらりと一同を見わたして、

『わたくしは、その考へは、いけないと思ひます。』

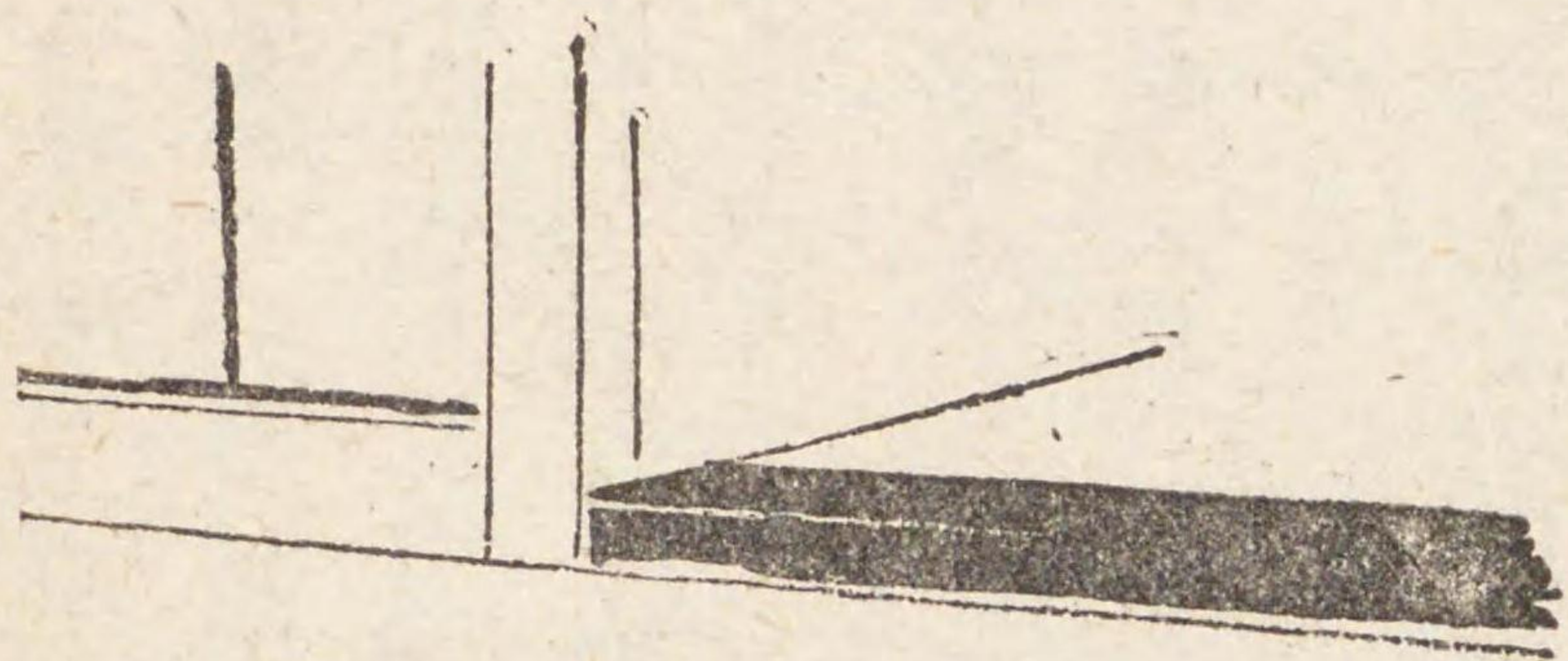
と、ひと言、ぶあひさうにいひました。

『ああ、さうですか。では、何かいいお考へがありませんか。』

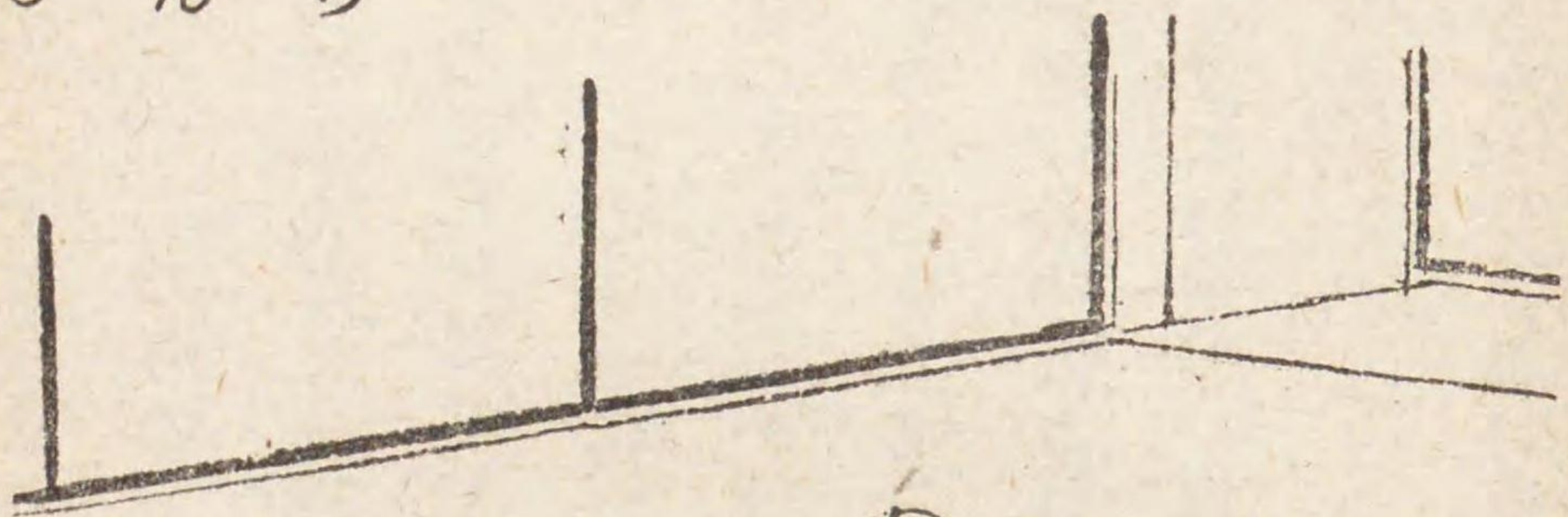
と、内藏助

は、静かにた
づねました。

『いや、べつ
によい考へと
いつてはあり
ません。しか
し、この城に
據つて ふた



たびお家を立
てていただき
たいといふ、
そのお願いが
いけませんな。
それはお願いで
はなく、お上^{かみ}に
せまるといふも
のです。一つまち
がつたら、むほん
人になつてしまひ



ますぞ。それでは、亡き御主人のお名までけがれませう。それよりは、すなほに城をわたして、のちの御沙汰を待つ方がよろしからう。』

と、九郎兵衛はぐわんこに一理屈をのべました。

『御言葉ですが、それはいけないと思ひます。武士はただ「義」の一字をまもります。この大事の場合に、お上を恐れてをられませうか。我々一同はつくせるだけつくして、お家のためをはからなければなりません。さうして赤穂武士の面目を立てるのです。』

内藏助は、言葉だけはやはり靜かにいひました。

『いや、それはうはべの理屈。實際お上からにらまれては、大學様のお身のためにもなりませんぞ。』

と、九郎兵衛もなかなか負けてはゐません。

『御城代の仰せのとほりです。おめおめこの城を明けわたすことは出来ません。』

と、ある一人がかうふんしてさけびました。

『我々は天下の兵を引き受ける覺悟がありますぞ。』

と、ある一人がわめきました。

『お家が大事です。お家が大事です。』

『お上にも、そのくらゐのお慈悲はございませう。』

『とにかく、歎願して見ることです。』

『もし、お聞きとどけがなければ、一同城を枕に討死するまでです。』

『どつちにしても、すてる命は一つです。』

めいめいの口から「義」を思ふ一心が、火のやうになつてほとばしり

ました。

けれども九郎兵衛も家老です。自分のたてた理屈はあくまでもおしとほす氣です。さわぎ立つた人々をおししづめて、九郎兵衛は根氣よく自分の考へをのべたてました。

原惣右衛門は づつと立つて、九郎兵衛のそばへつめよつて行きました。

『御家老、ここにゐる者は、みんな御城代のお考へと、同じ考への者ばかりでございます。お考へがちがふなら、だまつてお歸り下さい。さ、はやくお歸り下さい。』

と、刀の鞘に手をかけるばかりのけんまくを見せました。

今は、家老の威光もなくなつてゐるところですから、九郎兵衛はその

けんまくにおそれてそこそこに、そこを逃げだしました。九郎兵衛につづいて、岡林空之助、玉蟲七郎右衛門、伊藤五右衛門、外村源左衛門、近藤源八といふやうな連中も、その席を去つてしまひました。

九郎兵衛らが立ち去ると、相談がすらすらと進みました。そして多川九左衛門と、月岡治右衛門と、この二人の者を使として、江戸城の役人へ、「哀願書」を差し出すことになりました。

しかし、その哀願書には、内匠頭の舎弟大學に家を立てさせて下さいと、露骨には書いてありませんでした。

『我々一同、赤穂の城をはなれてちりぢりばらばらになりますのは、しかたがございませんが、相手の上野介が無事にをりましたは、一同どこへも顔向けがならないと申してをります。もちろん心得ちがひのないや

うに、よくさとしてはをりますが、何分田舎者のことですから、いつこ
くで、なかなか承知いたしません。で、どうかこの際、何か一つ、わた
くしども一同の者が、安心の出来るやうな御沙汰をたまはりたい。さう
すれば、めいめい、切腹する覺悟でございます。』

哀願書にはかうかいてありました。何か一つ一同の者の安心の出来る
筋すぢといふのは、つまり大學に、家を立てさせてくれといふ意味でした。
そして、一同腹を切つてしまふといふのでした。

あくる日、多川と月岡とは、この哀願書を持つて、江戸へたつて行き
ました。

三月三十日。多川と月岡とが、江戸へたつたあくる日、内藏助はまた
また一同を、お城へ呼びあつめました。一同といつても、その一同の頭數
が、ぐつと減つてしまつて、この日に集まつた者は、わづかに五十四人。
はじめ集つた時の三百七十人にくらべると、六分の一にもたりませんで
した。しかし心のぐらぐらした者は、だんだんにのけられて、それこそ
ほとんど決死の義士ばかりでした。
内藏助は、かへつて、この頭數の少ない人々を、たのもしく思ひまし
た。

四 敵討かたきの盟約めいやく

——内藏助は、最初から上野介を討つて、主君のうらみを晴らさ
うといふ決心でした。しかし、浮草のやうな人々に、それを打明

けては、目的をはたさずまたげになると思ひました。そして、まづ、人々の決心をたしかめるために、いろいろに心をくだき、考へをねりました。――

その日には、片岡源五右衛門、磯貝十郎左衛門も、江戸から歸つて來てゐました。二人はもちろん、内匠頭の墓前でちかひを立てたとほり上野介を討ちとる決心でした。

武林唯七も、やはり江戸からかけつけて來た一人ですが、これは籠城ろうじやうをして討死する考へてゐました。

千馬三郎兵衛は、何か内匠頭の御機嫌ごきげんをそこねて、ちやうどそのころ大阪へ歸りかけてゐましたが、御主人切腹と聞くと、すぐに赤穂へ引返して、これも籠城する考へてをりました。

頭數が、大方そろつたところで、内藏助はずらりと一座を見わたしました。

『もうこれで、おいでの方もないでせう。』

かういつて内藏助は膝ひざをすすめました。その様子が、いつもよりは、ぐつと落ちついて、しかも弓に絃つるをはつたやうに、ぴんと張りきつたところが見えました。

『さて、おのおの方。』と、内藏助は、おもおもしろく口を切りました。

『この間から、籠城をする、天下の討手を引き受けよう、誰しも、その決心でをりましたが、今日からしてお集まりになつた方は、五十餘人、六十人にはたりません。これでは、とても籠城は出來ないと思ひます。

もつとも、赤穂五萬石の武士と百姓とが、のこらず心を合せて籠城をし

ても、この小城では、よく防いで十五日か二十日、死物ぐるひにささへて一ヶ月とはささへることが出来ないでせう。まして六十人にたりぬ小ぜいでは、門を一つまもることさへむづかしい。おのおのには、ここをよくお考へ下さい。』

内藏助の顔には、今ありありと、悲憤の色があらはれて來ました。

『おのおの方。いたして效のないことをして、何になりませう。また、それが亡き御主人の手向けにもなりません。それよりは、お城受取りの役人が來られたら、いさぎよくこの城をお渡しいたして、それからわれわれ一同、打ちそろつて、この城で切腹しようではありませんか。今となつては、われわれの取る道は、それよりほかにないと考へます。』

集まつてゐる人々も、「なるほど、この小人數になつては、それより

ほかにしかたがない」と思ひました。一同は、内藏助の言葉にしたがふことにしました。

『それならば、誓ひをいたしませう。』

内藏助は、おごそかにいつて、懷中から一つの巻物を取りだしました。

それは、めいめいが名を書いて、その下に血判をおす連判狀でした。

源五右衛門と十郎左衛門とは、たがひに顔を見合つて、眼と眼と何かいひあつたまま、だまつてうつむいてゐました。

しんとしたうちに、めいめい自分で名を書いて、薬指を切り、ぼたぼた血のしたたる指を、名前の下におしました。これが血判です。連判狀は、順々にまはつて、おしまひに矢頭右衛門七のところへ行きました。

右衛門七は長助の子で、その年十七歳でした。連判狀を引きよせて、

名前を書かう

としますと、

『矢頭殿。』

と、内藏助がと

めました。

『御身はまだ年がち

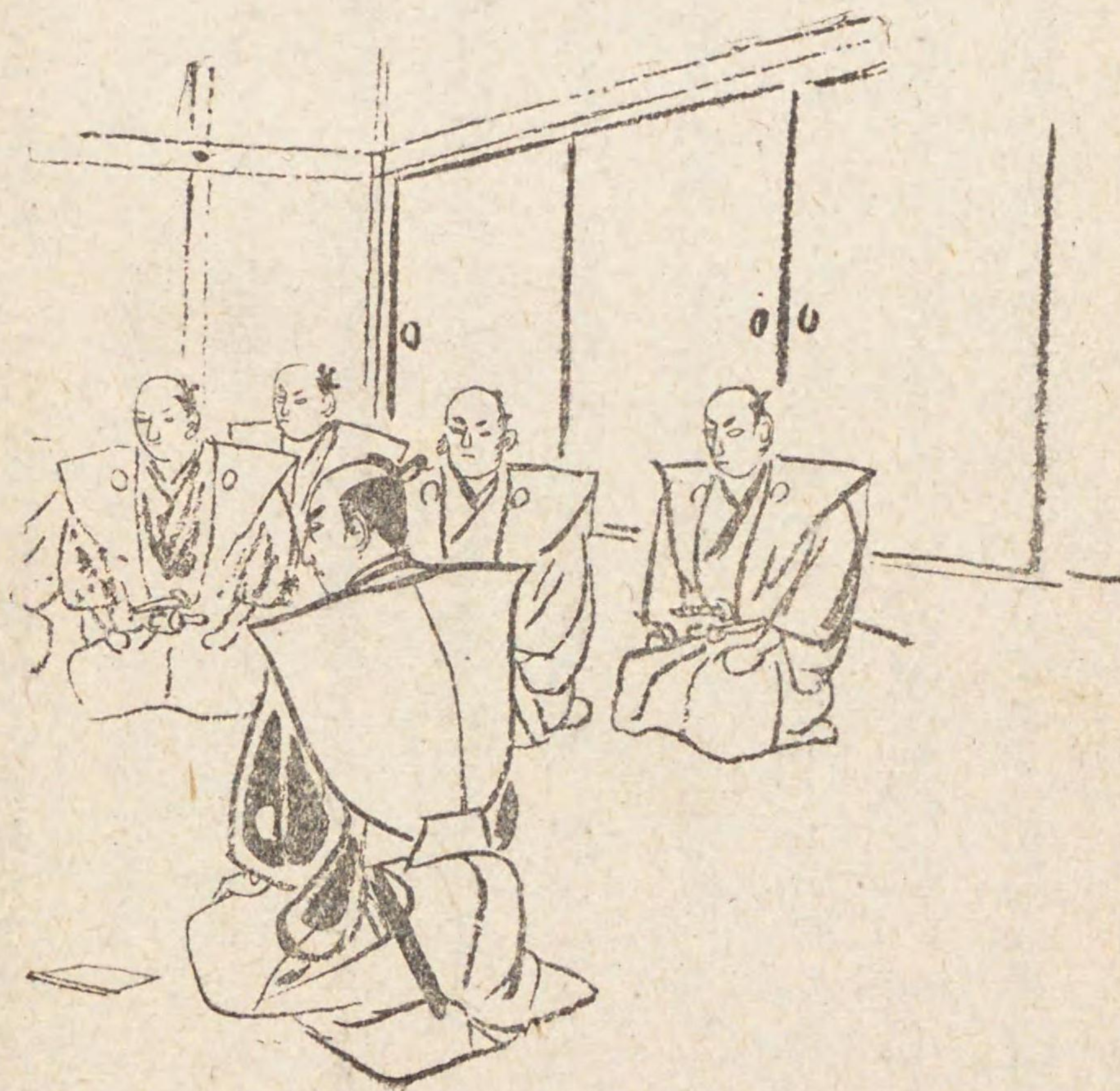
ひさい。それに——』

内藏助は、右衛門七

のうら若い美しい顔を

見まもつて、

『御身はこの春からお



城に出るやうになつた

ばかりだ。この連判に

加はらんでも、誰も御身

が忠義を知らぬとはいひ

ませぬぞ。加はらんがよろ

しからう。』

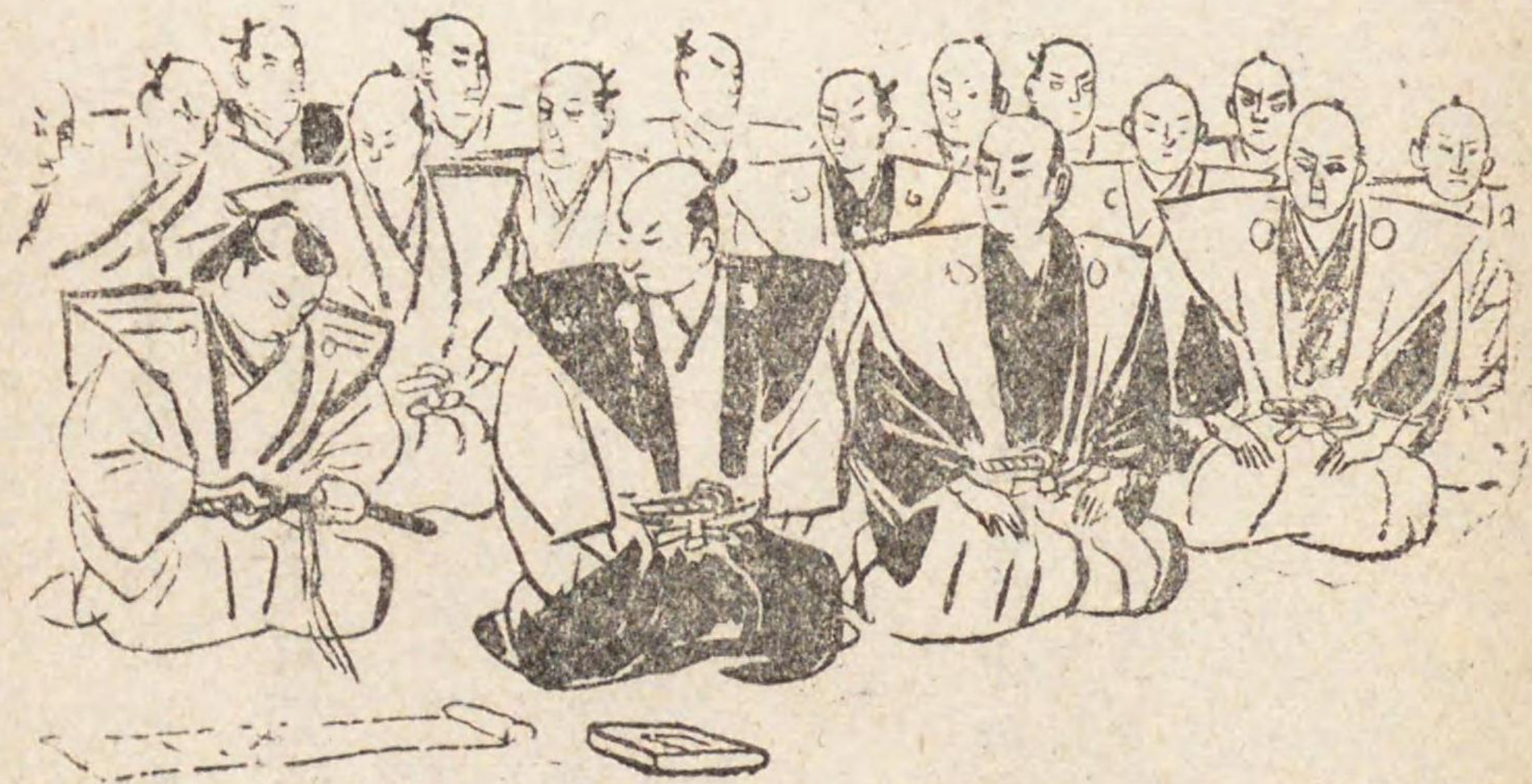
『これは御城代にも似あはな

いお言葉です。』

右衛門七は顔をまつ赤にし

て、きつとなりました。

『たとへわたくしの御奉公は、



短いいたしましたしても、先祖代々御恩を受けてをります。おのおの方と少しもちがつたところがございません。それとも年がわかいかから、役には立たぬ、志をとげ得ないとお考へてございますか。それならば、わたくしここで、お先きへ御免をかうむります。』

いきなり右衛門七は脇差を抜いて、腹へ突きたてようと思いました。

『お待ちなさい。』

内藏助は膝ひざをのりだして、

『覺悟のほどわかり申した。内藏助けつしてとめはしませぬぞ。血判なざるがよろしい。』

といつて、はらはらと涙をおとしました。

『はつ、ありがたうございます。』

右衛門七は、その脇差で、思ひきつて薬指を切りました。そして血判をおしてから、名前を書きました。

そこへ、お城の臺所の方に働いてゐる、三村次郎左衛門といふ小役人が出て來ました。誰かが、手早く連判状をかくしました。

次郎左衛門は、ちらとそれを見ましたが、やがてそこへ、靜かにすわり、おちついた態度でいひました。

『わたくし、ざんねんに存じます。みなみな様には、なぜさうしておかしくになるのでございますか。いやしい身分の者ではございますが、何とぞわたくしにも、御一同様の端にお加へをねがひたら存じます。』

しかし誰も、相手になりませんでした。

『いや、御身などの知つたことではない。まあまああつちへ退さがつたがよ

からう。』

さういふ者もゐました。

しかし、次郎左衛門は、そこを動かうとしませんでした。

『いえ、退がりませぬ。主人を思ふ心に身分の差別はないと存じます。

この上は、ぢきぢきに御城代におねがひいたします。』

内藏助は、じつとこの様子を見てゐて、少し微笑をふくみました。

『次郎左衛門のいふことは、たしかに理屈です。よろしい。連判にお加へなさい。』

鶴の一聲で、次郎左衛門は、すぐに、連判状に名を書いて、血判をすることになりました。

かうしてのこらず血判を終りました。連判状が、内藏助の手にかへる。

と、やがて一人一人の名前が、靜かに内藏助によつて讀み上げられました。

大石内藏助 奥野將監 河村傳兵衛 進藤源四郎
佐藤伊右衛門 原惣右衛門 小山源五右衛門 佐々小左衛門
吉田忠左衛門 稻川十郎左衛門 間瀬久太夫 田中權右衛門
多藝太郎左衛門 波部角兵衛 幸田與三右衛門 里村津右衛門
岡野金右衛門 岡野九十郎(後に金右衛門) 長澤六郎左衛門 平野半平
近松勘六 潮田又之丞 山上安左衛門 早水藤左衛門
間喜兵衛 間十次郎 榎戸新助 菅谷半之丞
上島彌助 中村清右衛門 灰方藤兵衛 千馬三郎兵衛
中村勘助 橋本平左衛門 仁平郷右衛門 高谷儀右衛門

川田八兵衛へ久下織右衛門 大高源五武林唯七 92
貝賀彌左衛門 茅野三平 岡島八十右衛門 勝田新左衛門
矢頭長助 矢頭右衛門七 各務八右衛門 陰山惣兵衛
豊田八太夫 神崎與五郎 吉田貞右衛門 大石瀬左衛門
猪子理兵衛 三村次郎左衛門

印のついた者は、後に盟約からぬけたり逃げたりした人。

堀部安兵衛や不破數右衛門、赤垣源藏など、十人あまりの義士の名が、これに見えないのは、江戸や京都にゐて、この席に出ることが出来なかつたからです。

岡野金右衛門は、このち病死して、その子の九十郎が父の名をつぎました。また矢頭長助は「討入」の前に死にましたから、「四十七士」のうちに加はつてをりません。

さて、内藏助は連判状を読み上げてしまふと、へんな顔をしました。連判状の名に、席にゐる頭數の二人だけがぬけてゐるのでした。

『どうしたのですか。』

と、内藏助は源五右衛門と十郎左衛門との方に向かつて、たづねました。

『いや、われわれは、その連判状には加はりません。』

と、二人は氣色ばんでいひました。

内藏助は、眉をしかめたきり、何ともいひませんでした。

『なぜ、お加はりにならないのです。わざわざ江戸から歸つて來ながらどうしたといふのです。』

と、原惣右衛門が心配をして、なじるやうにたづねました。

『いえ、われわれは、むだにお城で、切腹しようと思つて、歸つて來た
のではありません。御城代のお考へとは、だいぶ考へがちがひます。』

と、源五右衛門は、深く信ずるところがあるやうにいひました。

『どちらがふのですか。』

惣右衛門は、「をかしたことをいふ」といふやうに、問ひ返しました。

『では、申上げるのもむだとは存じますが、一應お耳に入れませう。我
我二人は、泉岳寺の御墓前で、ごらんのとほり髻ちんぢりを切りました。これは
上野介を討つて、亡き御主人のおうらみを晴らし奉らうといふちかひの
しるしてございます。江戸からはるばる歸りましたのも、じつはこのこ
とを、おのおの様にお話いたしましたして、かたむち敵討の望みがとげたいばかりで
ございました。それがおのおの様には、お城で御切腹ときまりましたは

何も申上げることもございません。今は我々は、我々の思ふがままに、
やるだけのことでございます。』

と、二人はかはるがはる、このかねてのちかひと内藏助らの考へとち
がつてゐることを、はつきりとのべました。さうして、つつと席をはな
れて歸らうとしました。

『お二人とも、お待ち下さい。』

その時まで、聞いてゐるのかゐらないのかわからないやうに、だまりこ
くつてゐた内藏助は、ふとさういつて、二人を呼びとめました。

『内藏助、あらためて御一同に、御相談があります。』

源五右衛門と十郎左衛門とは、座に歸りました。一同は何事かと、耳
をそばだてました。

内藏助は、今、命をすてて臣下の道をつくさうとする一同の前に、そのほんとの心を打ち明ける時が來ました。眼はいきいきと輝き、頬には赤みがさして來ました。そしてその聲には、眞心からしほり出す強い強いひびきがありました。

『ただ今、片岡、磯貝のお工人のいはれたことは、じつはわたくしもさう思つてゐたのです。あらためていふまでもなく——』

内藏助はそこで一段と聲を強くして、

『我々のかたきと申すは、まさしく吉良上野介殿でございます。お城において切腹する命を、しばらくのばして、同じくば上野介殿を討つてから、死ぬのが眞の臣下の道かと考へられます。もつとも、大學様に、跡目御相續おつらぞくの願ひもあり、事をいそぐ必要もありませんが。』

『なるほど、なるほど。それはさうだ。』

『御城代のおつしやるとほりです。』

『上野介の白髮首しろがくびをとるのが何よりです。』

『わたくしも、たぶんそんなことに、なるだらうと思つてゐました。』

と、源五右衛門らをはじめわかい連中は、めいめいにさういひあつてをどりしてよろこびました。

けれども、吉田忠左衛門をはじめ、年をとつた連中は、にがい顔をして反對しました。その人たちはかういひました。

『昔から敵討は、容易なことでないとしてあります。ことに上杉家の主人は、上野介の子ですから、敵には十五萬石といふ大家の味方があります。この味方が、かはるがはる上野介の邸をまもつてをりませうから、』

これを討つといふことは、なかなか大へんです。』

『また、こちらでも、五人や十人ではありませんから、心を合はせて、はかりごと謀をすすめて行くことが、非常に困難です。かりに、武運強く、望みがとげられるとしても、二年三年と、ながい時間をかけなければなりません。』

『すると、我々老人は、それまで生きてゐられるかどうかわかりません。また、上野介にしても、それまでには死んでしまはないともかぎりません。それでは、何事も水のあわです。まして、もし討ちそこなつた時は恥の上塗りです。それよりは、この城で切腹して、臣下の道をまもつた方がいいと思ひます。』

老人たちは、先きの命の短いのを知つて、死をいそぎました。ただお

城で死なうとぐわんばりました。

内藏助は、老人たちのその心もちを氣のどくに思ひました。けれど、一心をつらぬくために、この老人たちを説きふせなければならぬと思ひました。

『人の命には、わかいても年をとつたありません。天命ならば、誰が先きに死ぬかわかりません。また、我々心を合せましたら、敵に上杉十五萬石の味方がありましても、少しも恐るるに足りません。まづ、御主人内匠頭様の御無念を考へてごらんになるがよろしい。我々どうして、むざむざお城で死んでしまはれませうか。今は、この五十餘人の者は、一心同體です。もし不幸にして、先に死ぬ者があれば、後に残つた者が志をついで、しとげればいいではありませんか。』

『しかし、さうすると、わたくしたちは、生きてこの城からはなれてしまはなければなりません。わたしたちには、それもつらいことだ。』
と、老人たちはどこまでも、老人らしいことをいひます。

これには、内藏助もまつたく困つてしまひました。けれども、くり返しくり返し根氣よく説きつけました。

老人たちも、内藏助のそのまごころに動かされました。そして、とうとう敵討の説に賛成しました。

わかい者たちは、膝をたたき、腕をさすつてよろこびました。内藏助も、ひと息ほつとつきました。

臣下の取るべき道が、かうしてきまりました。

そこで内藏助は、「このことは、おたがひにかたく秘密をまもつて、そ

れが、たとへ父母兄弟、妻子であつても、うち明けてはならぬ」といふ約束を、一同にもとめました。そして一同の者は、かたくそれをちかひました。かうして敵討の盟約が出来ました。しかしこの盟約は、盟約に加はつた者のほかは、夢にも知りませんでした。

それから二三日すると、小野寺十内が、京都から歸つて来て、すぐに内藏助の邸をたづねました。十内は、京都で「お留守居」といふ役をしてをりました。有名な伊藤仁齋の弟子でしたから、大そう學問が深かつたのです。内藏助も、十内の紹介で仁齋の弟子になつてゐたことがあります。そんな関係もありますから、内藏助は十内に、連判状を出して見せました。十内は小膝をたたいて「これは至極けつこうです。わたくしもお加へ下さい」といつて、血判をしました。

十内は、この時、六十歳。四十四歳の内藏助から見ると、十六歳も年上の老人で、それからずつと、内藏助の片腕となつて働きました。

つづいて村松喜兵衛と、その子の三太夫とが、江戸家老を見かぎつてやつて来る。さうかうするうちに、お家再興の哀願に行つた多川と月岡とが、すごすご歸つて來ました。しかも、内匠頭の從兄いとこに當る美濃大垣みのおほがきの城主、戸田采女正つとめめいしやうから、

『二人の使をもつていつてよこしたやうなことは、甚だわからずやの言分である。こちらの様子を知らぬからだ。内匠頭を思ふ者は、はやく城を明けわたして、その地を引きはらふことである。何事も、お上のお指圖をまもつて、おだやかにしりぞきなさい。』
と、かういふ半分おしかりの書面を持つて來ました。

内藏助がお家のおためとして考へたことは、まづ水のあわのやうになつてしまひました。そこで四月十三日、内藏助は、お城へ赤穂家中一同の總召集をやりました。大野九郎兵衛などの連中も、多川、月岡が歸つて來たから、何かよいことがあるのかも知れぬと思つて、のこのこやつて來ました。

ところが、これは大當はづれてした。内藏助は、きびきびといひわたしをしました。

『二人の使が、下手をやつたので、ぐづぐづしてゐると、大學様にまでごめいわくがかかります。また、籠城ろうじやうも出來ません。籠城をすると、大學様をはじめ御親類の方々にまで、ごめいわくがかかるやうになりました。今はお城を明わたすより他はないと思ひます。御めいめに、お考

へがあれば、えんりよなくさういつて下さい。』

と、かういはれて、九郎兵衛の連中は、みんな「なあんだ、つまらない」といふやうな顔をしました。しかし「お上にさからつて籠城するのはいけない」といつた連中です。誰ひとり、お城明わたしに苦情をいふ者がありませんでした。そして、一方、「城を枕に討死しよう」と、はやつた人たちは、もうみんな知らん顔をして、敵討の盟約に加はつてしまつてゐたのです。

お城明けわたしの決議は、かうしてわけもなく、はこんでしまひました。赤穂城が築かれてから、およそ五十七年、三代でもつて、浅野家と縁のきれる運命になりました。

五 哀しき離散

城は取上げられる。住む家までも追ひはらはれる。赤穂三百七十何人の武士は、かくてちりぢりに故郷をはなれました。そして、多くの者は、たくはへとてない浪人になりました。しかも盟約に加はつたものの力によつて、その退散は、静かに整然として、一糸みだれませんでした。

お城明けわたしに、みんなの心が一致してしまふと、内藏助はまづ領分内の百姓と町人とに出してある紙幣を、ほんとお金に引きかへました。

領分内の百姓、町人は、大そうよろこんで「ああ、えらい御城代様だ」

といつて、内藏助を神様のやうにほめました。なぜかといひますと、そのころどこの城主でも紙幣しへいを出してゐましたが、その紙幣は、領分内では通用しないのでした。つまり領分から一步でも外へ出ると、それは紙くづも同様になつてしまふのでした。

その時、赤穂の領分内で使つてゐた紙幣も、やはりさうでした。その紙幣は、内匠頭といふ城主が出してゐた紙幣ですから、内匠頭が亡くなり、お城も取上げられると、その紙幣は、紙くづも同様になつてしまふのです。それで内藏助は、領分内の百姓、町人に、めいわくをかけてはならないと思つて、何よりも先きに、お城の金藏かねくらをひらいて、紙幣と、金、銀、錢ぜに——ほんとのお金と引きかへたのです。

さいはひにも、お城の金藏には、軍用金のために、かなりのお金がありました。それで、紙幣をのこらず引きかへても、まだだいぶ、お金が残りました。それで、そのお金をにはかに浪人する三百七十何人の者に、分配することにしました。もつとも、お金のことは、内藏助一人で取りきめてしまはうとはしませんでした。いつも大野九郎兵衛や、岡林奎之助、近藤源八など重立つたものに、それぞれに相談しました。

お金の相談になると、九郎兵衛らはいつとも、のこのこ城へ出て来て、鼻息荒くその考へをのべ立てました。そして、

『お金の分配は、めいめいの知行高によつて、めやすをきめるがよろし

う。』

と、いひました。なるほど、さうすると身分の上の者ほど、おほくのお金がとれるのでした。

『いや、それはいけないでせう。』

と、内藏助は反対しました。

『わたくしは、平等に頭割にする方がいいと思ひます。身分の低い者だからと申して、御主人を思ふ心にかはりがありません。また、ふだんからまづしく暮らしてゐるのです。それがきふに浪人になるのですから、少しでもよけいに分配してやらなければなりません。』

『しかしわれわれには、家來などもをります。そのしまつもつけなければなりません。知行高で割當てるのが當前あたりまへです。』

さういつて、九郎兵衛はあくまでもぐわんばりました。岡林、近藤、

外村、伊藤、玉蟲などの五人の番頭ばんがしらも、九郎兵衛に賛成しました。内藏

助は、お金のことで、そんなにあらそふのを好みませんでした。それで

しかたなく、さうすることにしました。しかし自分は、その分配されたお金を、一文もとりませんでした。

お金の分配がさうきまると、九郎兵衛はぐつとそりかへりました。

『それ見ろ。お城を明けわたすのも、このおれがはじめつからさういつたことだ。お金の分配だつて、結局おれのいふとほりになつてしまつたぢやないか。だが、このごろお金藏のお金をぬすむ者があるさうだからゆだんがならん。』

と、せがれの郡右衛門などに、いつて聞かせました。

——「忠臣藏」の芝居では、この郡右衛門が定九郎。九郎兵衛が、斧きり九太夫になつてゐます。

そのころ、お城のどさくさまぎれにつけこんで、よくお金藏のお金を

ぬすむ者がありました。

『大切なお金藏をあづかつてみながら、さうたびたびぬすまれるとは怪しからん。これは行きがけの駄賃に、八十右衛門がぐるになつてやつてゐるのではないか。』

ある時、九郎兵衛は心やすい者に向かつて、うつかりさういふ言葉をもりました。

お金藏の奉行は、原惣右衛門の實弟、岡島八十右衛門でした。八十右衛門は大力で、氣骨があつて、潔白な武士でした。で、誰がいふとなく九郎兵衛の蔭口が耳に入ると、かんかんに怒りました。

『九郎兵衛め、おのれの心に引きくらべて、けしからんことをいふ。』と、紙幣の引きかへのをはるのを待つて、ぶつさき羽織と小倉の袴を

小袖、麻^{あさ}袴^{かみしも}に着かへて、九郎兵衛の邸^{やしき}へ行きました。

『たのまう。』

と、八十右衛門は、玄關さきに仁王立ちになつてどなりました。

その聲を聞いて、九郎兵衛はぶるぶるとふるへ上りました。そして、『ゐないといへ。留守だといふのだぞ。』

と、小聲で家の者にいひつけました。家の者は玄關に出て、『出かけてをります。いつ歸るかわかりません。』と、そわそわしていひました。

『さうですか。亡き御主人の御用で、ぜひ今夜中にお目にかかりたいのです。お歸りになつたら、すぐにお知らせ下さい。お知らせがなければまた來ます。』

八十右衛門はさういつて、一たんすなほに歸りました。

『どうせ赤穂には、いつまでもみられないのだ。めんだうくさいから、今夜のうちに立退いてしまはう。』

と、九郎兵衛は、家の者にいつて、こそこそ、旅立ちの支度をはじめました。

すると、夜の十時すぎのことでした。八十右衛門は、またやつて来てどンドン門の戸をたたきました。大力ですから、えんりよなくどンドンどンドンたたくのが、すごいやうにひびきます。

九郎兵衛は、まだ支度最中でした。

『やつて来たぞ。なんでもかまはん、追ひ返せ、追ひ返せ。』と、聲までわなわなふるはせました。

『ですが、岡島様

は大力で、いつこ

くな方でござい

ますから……。』

と、家の者も

しりごみして

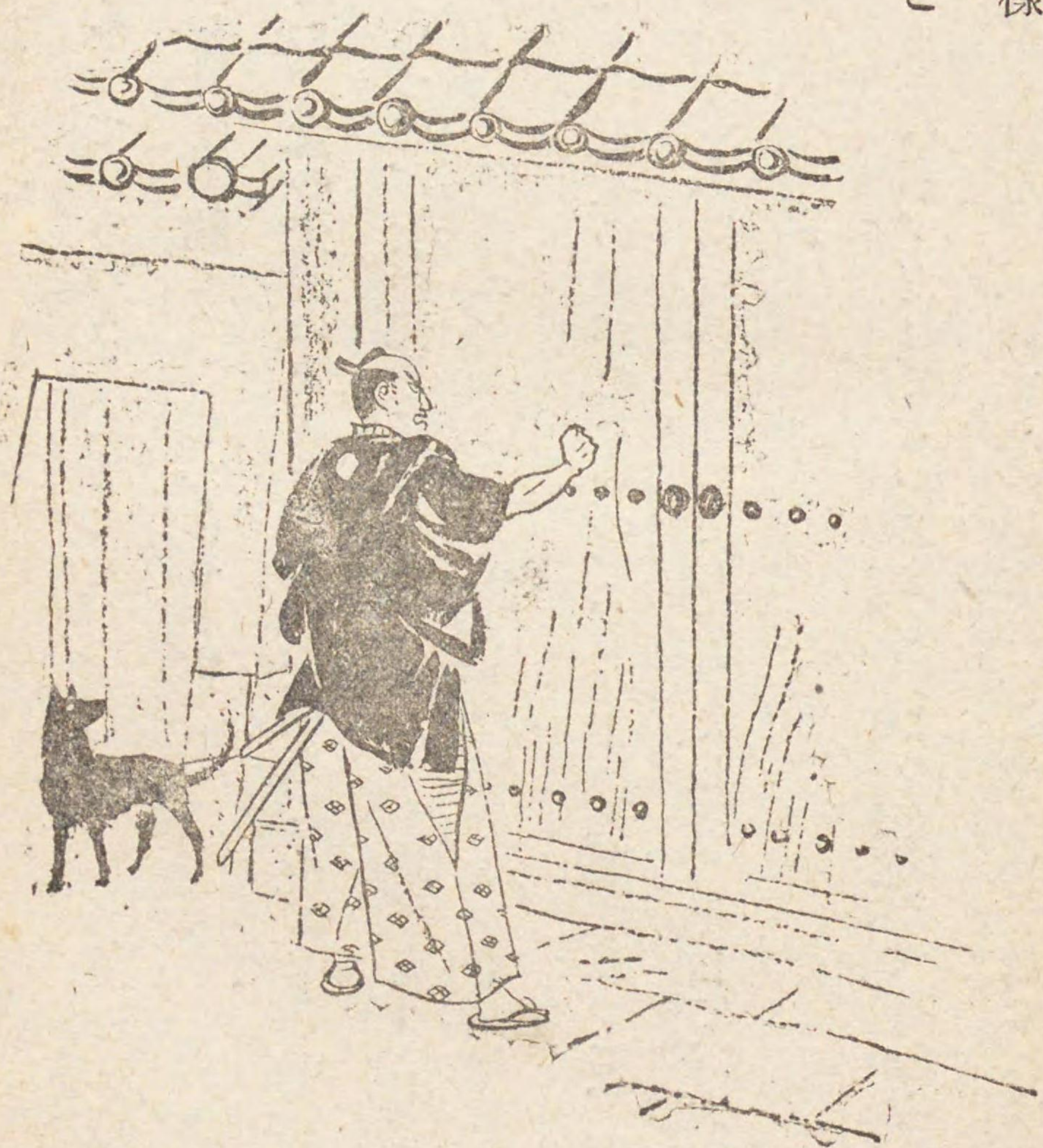
取次に出よう

としませんで

した。

『ではよい。

おれは裏口か



ら逃げる。駕籠を駕籠を。』

九郎兵衛は青くなつて、うろろしました。

『いけません。お駕籠は玄關につるしてあります。』

『女のもかまはん。女の駕籠の支度をしろ。支度をしろ。』

九郎兵衛はさういつて、女の駕籠にのつて、裏口から逃げようとした。

いつまでたつても、取次の聲がしないので、八十右衛門は怒つて、門の戸をふみやぶるやうないきほひになつてしまひました。そして、大音に叫びました。

『當家には、人がゐないか。だれでもかまはん。よつく聞け。岡島八十右衛門は、金に目がくらんで、御主人の恩を忘れるやうな犬侍ではない

ぞ。おのれの心にくらべて、おあづかりの金銀を、ごまかしたとは何事だ。元の御家老だとして、聞きずてにならんから、ちきちきに掛合にまゐつた。刀にかけても、黑白を明かにするのだ。』

それでもやはり、なんとも返事がありませんでした。八十右衛門はじれて、いろいろにののしりました。

その間に九郎兵衛は、裏門から逃げて、その夜は甥にあたる伊藤五右衛門のところに泊りました。九郎兵衛が逃げると、その妻も、郡右衛門も、その妻も——一人々々、こつそり、こつそり、家族のこらず逃げだしてしまひました。さうしてその後、郡右衛門の子の三歳になる女の子と、その乳母とだけがのこされました。

(この子は、呼びさまして、もし泣きだされては大へんだといつて、郡

右衛門夫婦がおきざりにしたのでした。その後、内藏助はその子を引き取つて、親しくしてゐる町人の家へあづけました。)

八十右衛門は、ずるぶん根氣よくどなつてゐましたが、おしまひに張り合ひがぬけてしまひました。そして、

『おのれごとき腐れ武士を斬る氣はないが、後々のこらしめのためにやつて來たのだ。出てあはんとならば、立ち歸る。以後は氣をつけろ。卑怯者め。』

と、さんざんにののしりちらして歸りました。

お城受取りの役人の到着の日は、だんだん近づいて來ました。さうして、内藏助らの盟約めいやくに加はらぬ多くの者は、おいおいに赤穂の城下を立

退いて行きました。悲しき離散——お祖父おぢいさんから父へ、何代か、住みなれた故郷をはなれて、いづことも定まらぬ住家をもとめて、はるばると旅に出て行く家中の人の心は、じつにあはれてした。たとへ大野九郎兵衛のやうな者にしても、はなれ行くお城の方をふりむいては、ほろほろ涙をこぼしました。まして、心弱い老人や女です。國をうしなひ、家も職もなくなつた悲しさが、ひしひしと胸にせまつて、ただ、ほろほろと泣きました。さうして曇る眼に、お城の方を見返り見返り、赤穂さかひを出て行きました。

花は散つて、世は一日一日に、はればれしい若葉のころになりました。しかし、赤穂の城下だけは、一日一日にひつそりと淋しくなつて行きました。

内藏助らは、そのかなしみを見ながら、せつせつとお城を明けわたす支度をしました。お城受取りの役人をむかへるために、橋もかけかへました。道路もなほしました。そして、城中の武器を整頓する、隅から隅まで掃除をする――四方八方に心をくばつて、少しの手落ちもないやうにしてをりました。それでお城でもどこでも、まるでお正月が來たやうにきれいになつてゐました。

それでも世間ではまだ「赤穂の者は、籠城するかも知れぬ」といつてゐました。

そのころお城のなかで、七日ほどつづいて、たくさんの書きつけや帳面を焼きました。するとその煙を見て、

『あれは鐵砲の彈をつくつてゐる煙だ。いよいよ籠城にちがひない。』

といつて、さわぎ立てて、そのうはさがばつと立ちました。赤穂領分内の者は、みんな今にも戦がはじまるだらうといつて、びくびくしてをりました。

と同時に、城受取りの役人も、間もなくやつて來るといふので、近國の大名小名も、めいめい國境に兵を出して、警固の任に當りました。

『大石内藏助もゐることだ。やすやすと城を明けわたすやうなことはあるまい。』

と、警固の任にあたつてゐる人たちも、みんなさう考へてゐました。そして「いざ」といへば、いづれもまつ先きに、旗標、馬標をおしたてて進んで、功をしようと思つて待ちかまへてゐました。

まづ、備前岡山の城主、池田綱政は、家老の津田左源太を大將として

五百の兵を國境、虫上むしがみにさしむけました。また、因幡鳥取いなばとっとりの城主、池田綱清は、家老、池田岩見を大將として、一千餘の兵を、播磨はりまの國境にさしむけました。

そのほか播磨姫路ひめぢの城主、本田忠國、播磨明石の城主、松平直明なほあきも、領分境まで兵を出す。海手の方では、讃岐高松さぬきの城主、松平頼常よりつねが家老大久保主膳しゆぜんに、三十艘さうの兵船をつけて、赤穂の沖へさしむける。つづいて、讃岐九龜さぬきの城主、京極高豊きやうごくたかとよ、阿波徳島の城主、蜂須賀綱矩はちすずかつねのりも、それぞれ兵船を赤穂の沖へさしむけました。さうして、海から陸から、遠くから赤穂の城をとりかこんで、ちよつと見ると、いつ戦がはじまるかも知れない有様でした。

ある日のことでした。足輕頭あしがらのかしらの吉田忠左衛門が、足輕を引きつれて城内を見まはつてみますと、大ぜいの人足にんぞくにまじつて、へんな男が一人、うろろしてゐました。

忠左衛門は、ちろりと一目見ると、
『うさんなやつだ。召捕れつ。』
と、號令しました。

足輕たちは、ばらばらと、そのあやしい男にかかつて行きました。すると、そのあやしいやつが、つかつかと忠左衛門の前へすすんで來ました。そして、

『御眼力がんりき、恐れ入りました。いかにもわたくしは、御城内の様子をさぐらうとして、まぎれこんで來たまはしものでございます。あらはれたからは、しかたがございません。お繩おなはにかかつては、武士の恥辱ちぢよくでございます。ま

す。腹を切ります。どうか、お城の
すみをお貸し下さい。』

かういひましたから、忠左

衛門はにつこり笑つて、

『いやいや、それにはお

よびません。あなたが

まはしものになつて

おいでになつたの

も、また私が、か

うして、城を見

まはつてをり



ますのも、い
づれもめいめ
いの御主人の
おためです。

この赤穂の城

には、もう主

がございませ

ん。ただ、お上

から、城を受け

とりにおいでに

なるのを待つて、



一同、殉死じゆんし（主人の後をしたつて腹を切る）するばかりでございます。だれも籠城ろうじやうをしようとは思つてゐませんから、少しも秘密はありません。さあわたくしの後についておいでなさい。城内をのこらず、ごらんに入れませう。』

といつて、自分が先きに立つて、城のすみからすみまで見せてあるきました。

この間牒かんてふは、讃岐高松の城主、松平頼常まつらつねの家來、竹井金左衛門といふ武士でした。

金左衛門は、忠左衛門の膽力たんりよくと、さくりと竹をわつたやうなその心もちとに感心して、

『これで國へ歸るお土産が出来ました。ありがたうございました。』

と、くりかへして禮をいひました。そして、

『つきましては、もう一つおうかがひいたしますが、その御殉死に同盟の方は、幾人おありでございますませう。』

と、たづねました。

『ああ、同盟の者ですか。』

忠左衛門は氣輕にいつて、

『それは、これをごらんになればわかります。』

と、大切な盟約の連判狀を出して見せました。忠左衛門は、殉死の人数をかくす必要があるものかといふ考へてした。

金左衛門は、いちいち名前を見てから、さて、あらためて忠左衛門の顔を見まもつて、

『いろいろありがたうございました。して、あなた様は、どなたでござ
いますか。』

たづねられて忠左衛門は、きつとなつて、

『これは、けしからんおたづねです。わたくしは、あなたが命をすててこ
の城の様子をおさぐりにおいてになつたお心に感心して、かうして御案
内したのです。城の様子をごらんになつたら、もうお歸りになるがよろ
しい。わたくしが名前を名のる必要が、なんでありませう。ことに——』
と、忠左衛門は、一そう力をこめて、

『わたくしどもは、もう死んだものです。この世の名前を申し上げても
しかたがないでせう。戒名かいみやはこれです。』

自分で自分の戒名を書いてわたしました。そして金左衛門を、大手の

門の外まで送り出して歸しました。

内藏助も、後にこのことを聞いて、大そう忠左衛門に感心しました。

その少し前のことでした。堀部安兵衛と奥田孫太夫と高田郡兵衛との
三人——いづれもそろつて、腕つぶしの強い、そして少し氣の荒い勇士
が、江戸からやつて來ました。そしてすぐに、内藏助の邸へ、たづねて
行つて、

『籠城をするのですか。敵討をするのですか、どつちです。』
と、たづねました。

内藏助は、ゆつたりと落ちついてゐました。

『さうです。籠城しようといふ説もありましたが、それでは天下のむほ

人になりますので、それは思ひとどまることにしました。また、城をわたして、一同切腹してしまはうかといふ説もありましたが、それも、大學様のお身の上のためによろしくないといふので、やめになりました。さうして、とにかく、ひと先づ、城を明けわたすことに決まつてしまひました。』

といつたきり、連判状のことも、敵討のことも、口に出しませんでした。

二人の勇士はあきれかへつて、なんともいひませんでした。そして挨拶もそこそこに、ぶ



いとそこを出て、今度
は奥野將監しやうげんのところへ
行きました。

すると將監も、「敵討
のことは、だれにもい
つてはならぬ」といふ
盟約がありますから、内
藏助と同じやうなことをい
ひました。



三人は、いよいよがっかりして、
『赤穂の者はみんな腰抜けばかりだ。』

もうしかたがない。三人だけで、お城で切腹して、赤穂にほんとの武士のゐることを、天下に知らせよう。』

と、さう相談をきめました。

三人は、ぶんぶん怒つてゐました。三人ともに、赤穂の方に家がないので、一しよに宿屋に泊りました。

内藏助は、そのことを聞いて、

『今、そんなことをされては大へんだ。』

と大そう心配をしました。そして、叔父の小山源五右衛門を、三人の宿屋へやつて、それとなく『今かるはづみをする時でない。内藏助は、ただ、ほんやりお城を明けわたすはずはない。何か深い考へがあるのだ。』と、いはせました。

三人は、なるほどさうかとも思ひましたが、まだ信じられないので、

『その深いお考へといふのは、どんなことですか。』

と、たづねました。

小山源五右衛門は、この返事にちよつと困りました。そして、

『それはわしにもよくわからんが、まあ考へて見られるがよい。この場合、われわれ武士の取る道は、二つしかないではありませんか。城をわたして一同腹を切つてしまふか、または敵討ちをするか……。』

『いかにも、籠城をしないとすれば、さうですな。』

と、安兵衛は、ちよつと何かわかりかけて来たやうな顔をしました。

『そこで、城を明けわたして一同腹を切つてしまふのが、無駄死だとすれば——。』

『ふむ……。』

と、二人は膝をのりだして、

『無駄死だとすれば……。』

『おわかりであらうが。』

『なるほど。さうでしたか。それでじつはわれわれも……。』

と、さつとよろこびの色を見せていきほひこむ二人を、源五右衛門は制して、

『ま、ま、お待ち下さい。まだ、さう決まつたといふのではありません。さめるよりほかはないといふのです。もし、いよいよさうきまつたら、ぜひともあんたらの力も借りるのです。あんたらは、江戸の案内をよく知つておいでぢや。なあ、よいか。それに内藏助殿は、あんたらの真心

も見ぬいておいでぢやから、そのうちにはなんとか話があらう。てまづ今度は、江戸へ歸つて、しばらく様子を見ておいでなさい。』

まじめに、そして上手に、三人の心になるほどと思はれるやうに、説きつけました。

『さうですか。いや、わかりました。』

と、奥田孫太夫は、無骨に頭を一つ下げて、

『大石殿の深いお考へがわからなかつたことを恥かしく思ひます。ではお城引きわたしの様子を見て、すぐに江戸へ歸ります。』

と、淡白にいひました。

『さうです。さうしませう。』

安兵衛も、郡兵衛も、よろこんでそれに賛成しました。

この奥田孫太夫は、そのころ、日本一の劍術の先生といはれた堀内源太左衛門の弟子でした。先生から教へられて、大刀を使ふのが得意でしたが、討入の時も、二尺七八寸もあらうといふ大刀をふりまはして、敵かたきの片われどもを、さんざんに斬りまくりました。それで、後から見るとその刀がささらのやうになつてゐたといふほどの勇士でした。

堀部安兵衛も、堀口源太左衛門の弟子でした。高田馬場で、叔父の助太刀をして武勇をあらはしたことは有名な話ですが、その後堀部彌兵衛の養子になつて、内匠頭の家來になりました。孫太夫とは兄弟弟子でもあり、またどちらも、劍術の達人でしたから、よく氣が合つて、大そう仲よしてました。さうして、主人が切腹してから後も、二人はづつと一しよに手をととりあつて、すすみました。四十七士の盟約に加はつてからも

さうでした。二人は、「はやく上野介をやつつけてしまはう」といつては、若い人たちの元氣をつけて、いつも敵討をいそいでゐました。

高田郡兵衛も勇士でした。それで孫太夫と安兵衛と三人、兄弟のやうに親しくしてゐたのですが、郡兵衛だけは、討入の幾日か前になつて、どこへか姿をかくしてしまひました。

それからまもなく、江戸城のお役人が、赤穂へやつて來ました。さきへ來たのが、お目附の荒木十左衛門と榊原采女さかきばらうらめといふ人でした。内藏助は町はなまで迎へに出ました。つづいて、石原新左衛門と岡田庄太夫といふ人がやつて來ました。しかしこの人たちは、城を受取る役人ではありませんでした。城を明けわたせといふ命令をつたへ、そして城をしらべたり、いろいろ指圖をしたりする役人でした。

十左衛門は、ほかの役人と一しよに、城をしらべに行きました。その時内藏助は、十左衛門に向かつて、

『どうか、内匠頭の舎弟、大學を世に出して、浅野の家を立てさせるやうにお取りはからひ下さい。』

といつてたのみました。けれども十左衛門は、なんとも返事をしませんでした。

その日の晩方、内藏助は十左衛門の旅館へよばれました。

『道路の修繕といひ、城の片づけ方、すみからすみまで行きとどいて、じつに感心しました。さつそく、さう注進しておきましたから、お上でもさぞ御満足であります。』

と、十左衛門は、いろいろ内藏助のやり方をほめました。そして、

『さつき城内で願ひのことですが、あれは江戸に歸りしだい、十左衛門、きつとお上へお取次いたしませう。あの時返事をしなかつたのは、お役目の手前があるからでした。』

と、打ちとけていひました。これは、十左衛門が内藏助のえらいのに感心して、特別の親切でさういつたのでした。

ちやうどそのころ、播磨、龍野の城主、脇坂淡路守安照が、自分で兵をひきゐて、城を受取りにやつて來ました。日はもうとつぶりと、暮れてゐました。脇坂の兵は、赤穂の町をぐんぐん進んで、城の大手門の外に陣をとりました。

内藏助は、その時もう城に歸つてゐました。やがて脇坂から使者がやつて來ました。

『お上の御命令をうけて、脇坂淡路守がまゐりました。お城明けわたしは、明十九日、卯の刻（朝の六時ごろ）と聞きましたが、それに相違のないやうにおしなさい。』

と、その使者はいひました。

『承知いたしました。』

内藏助は、ていねいに答へました。

淡路守は、前陣、中陣、後陣、右翼、左翼といふやうに、兵を五つに分けて、戦の時と同じやうに陣を取りました。中陣には馬標（つまじりし）が立ちました。陣々には高張（たかはり）の提灯（ちやうちん）を立てつらねました。そして兵は、いざといへば、城へ攻めかかるいきほひで、槍をかまへ、鐵砲を折敷いてゐました。しかし城では、人がゐるかゐないかわからないほどに、静まりかへつ

てゐました。

『今宵（よ）一夜のまもりですぞ。氣をおつけなさい。火の用心が大事ですぞ。まちがひないやうにして下さい。』

内藏助は、自分であつちこつちを見まはりながら、さういつて、めいめいに注意をあたへました。さうして皆は、

『城にゐるのも今夜きりだ。これがお別れだ。』

と、しんみりと氣を引きしめて、その持場々々をまもつてゐました。むろん、ひと眠りしようとする者もありませんでした。

内藏助は大手の門へ行つて、櫓（やぐら）の上へのぼりました。そして、淡路守の陣を見おろしながら、

『ああ、夜があけると、この城はもうあの人たちの手にわたつてしまふ

のだ。』

と、そんなことを考へたりして、深い思ひにふけりました。

その時、淡路守の陣では、城の櫓やぐらに提灯の火影が、ちらちらするのを見て、きふにはつと、高張提灯の火を消してしまひました。

『さすがは脇坂殿だ。心得がある。陣のくばりもりつばなものだ。』

と、内藏助は大そう脇坂の陣立に感心しました。星の光が降るやうにまたたきをして、夜はもう眞夜なかてした。

城をまもる者も、城を受取らうとする者も、氣を張りつめた一夜は、なんのこともなく、しらじらと明けかかりました。

そのころ、また一隊の兵が、お城の搦手の門の外へやつて来て、陣を取りました。

それは、やはり城を受取りに來た備中、足守の城主、木下肥後守公定の軍勢でした。つまり、城を受取るお上の使者は、淡路守と、この肥後守との二人でした。

まもなく、卯うの刻ときになりました。いよいよ城を明けわたす時が來ました。

『それ、門をおあけなさい。』

内藏助は、今はなんの未練みれんもありません。りりしい聲で、思ひ切りよく號令しました。

大手の門、搦手の門、兩方の門の扉が、すぐにさつとおしひらかれました。

『門がひらいた。すすめ。』

淡路守は、大手の方

で號令しました。

『それ、門があい

たぞ。』

と、肥後守は

搦手からめての方で號

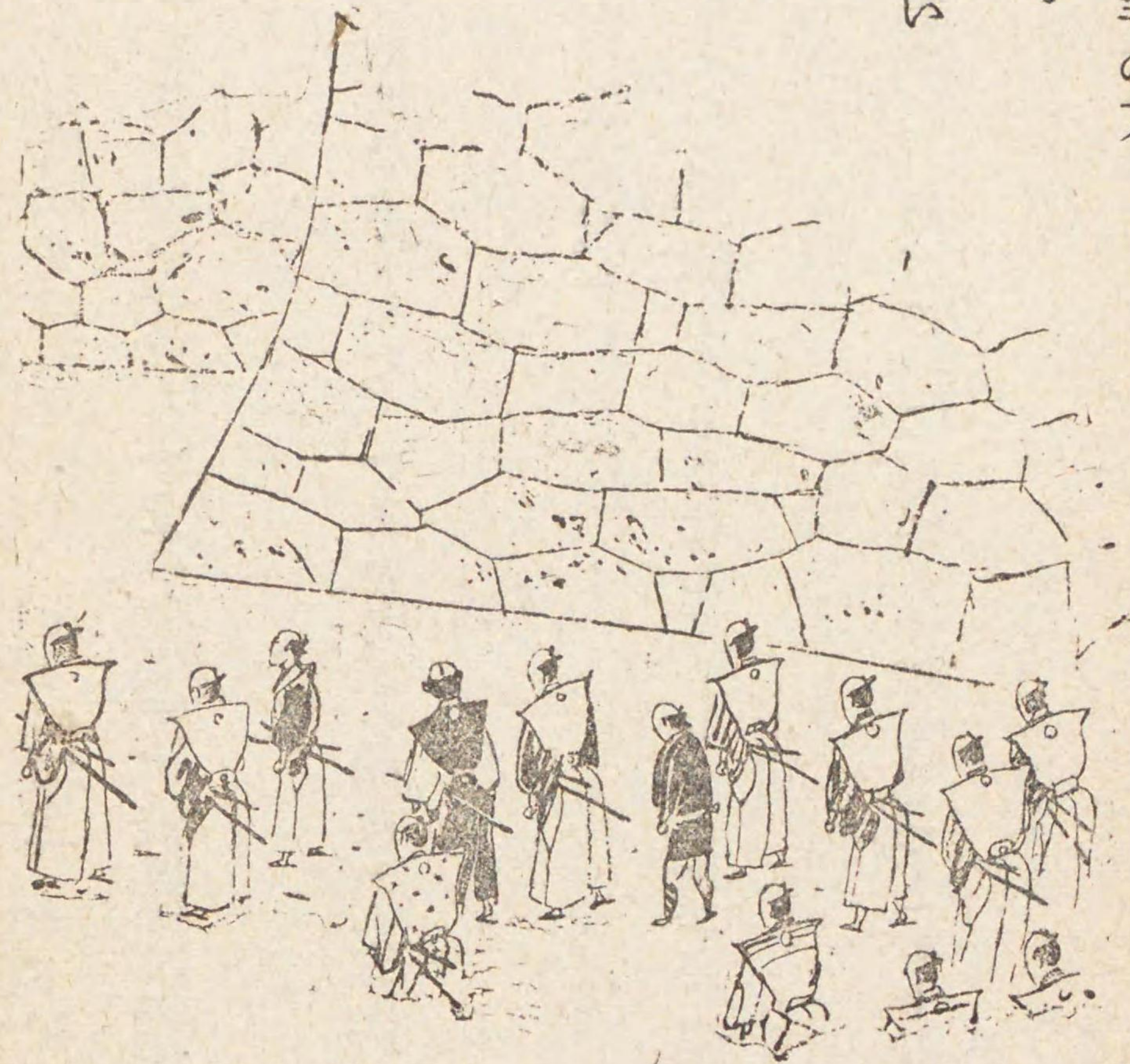
令しました。

兩方の軍勢

は、列をつく

つてしづしづ

と、自分の城



へ入つて行く

やうに、城へ

入つて行きま

した。

内藏助は、淡路守

と肥後守とを、お城の大

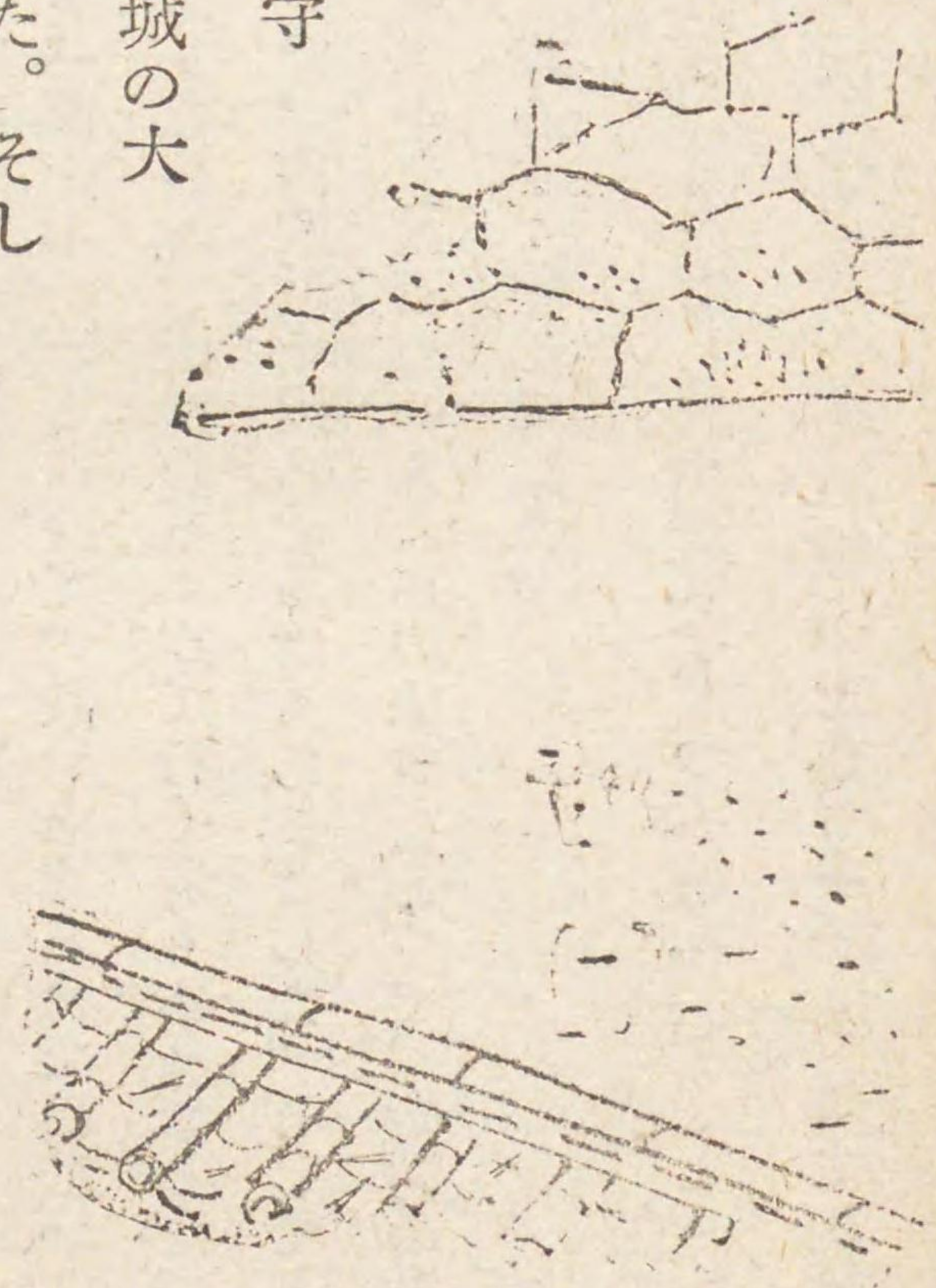
廣間に案内しました。そし

て、城をわたす手続きをしました。同時に、内匠頭の家來は、持場々々を

はなれて、淡路守と肥後守との家來が、代つてその持場につきました。

城は、まつたく内藏助らの手からはなれてしまひました。

まもなく内藏助ら一同は、しづかに裏門から出て、淺野家代々の菩提ぼだい



所、華岳寺へ引きあげて行きました。だれの頬にも、涙がながれてゐました。

六 一年と七ヶ月の間

同盟の人々が、「四十七士」となつて、敵討をするまでにはいろいろの困難がありました。盟約からぬけて行く者もありました。敵討ちをいそいで、内藏助を困らせる者もありました。そして上野介には、上杉家十五萬石といふ大名の味方もあつて、敵討の計畫と準備とは、苦心さんたんでした。

内藏助は、赤穂城明けわたしの用事がすつかり片づくとき、しばらく赤穂の近在の尾崎村といふところの百姓家をかりて、そこに引つこんでゐました。するとひろい世間のうちには、内藏助がすなほに、城を明けわたしたことを、腰ぬけだとか、意氣地がないとかいつて、わらつたり、悪口をいつたりする人が、ずるぶんありました。

大石は鯨の重しになるやらん

赤穂の米を喰ひつぶしけり

こんな、ひどいことをいふ者もありました。

けれども内藏助は、そんなことを聞いても、少しも氣にかけませんでした。

『いふ者には、何とでもいはせておけ。いまにわかることだ。』

と、たぶんさう思つてゐたのでせう。そしていういうと、腕に出來た

腫物の治療をしてをりました。

ある時、以前、内藏助が召使つてゐた老僕、尾崎村の八助といふ者がやつて来て、

『お城はおめおめと明けわたして、旦那様はいつまでこんな田舎に引つこんでおいでになるのです。一人として、おうらみを晴らさうとなさる御家來がなくて、殿様もさぞ御無念なこととございませう。』

と、つけつけいひました。そして、しよぼしよぼした目から涙をこぼしました。

内藏助は、じつと聞いてゐましたが、しかしそのことについては、何ともいひませんでした。

しばらくしてから、

『一生氣樂に暮すには、京都が一ばんよからうと思ふ。そのうちに、出發しようと思ふが、あつちへ行つてしまふと、またなかなかあはれん。長いなぢみだ、かたみをやらう。』

さういつて、一枚の繪をかいて、八助にわたしました。

内藏助は、わかいら八助をつれて、江戸へ行つてゐました。そして八助を供に、よく方々を見物してあるいたことがありました。その繪はその時の様をかいたものでした。一人の富士編笠をかぶつた侍と、一人の奴僕と。奴僕は、八助でした。

それで八助は、内藏助の心の底——やがて、江戸に出るといふ考へがいくらかわかつて、大それよろこんで歸りました。

六月の末になりました。一時はだいぶ、ひどかつた腫物も、すつかり

よくなりました。

『いつまで、ぐづぐづしてをられん。一日もはやく京都まで出よう。』

内藏助は、妻や主税ちかちにさういつて、旅支度をいそがせました。そして二十四日に、赤穂に近い新濱御崎しんはまみさきといふところから船にのつて、故郷の地をはなれました。

世を去りし君が名残の涙かな

みち來る潮も我が袖の上

その時、内藏助は、かういふ歌をよみました。

かなたには、赤穂城の白壁が、松の木の間にちらちらして、おぼろおぼろに見えました。内藏



助は、い

くたび振

りかへつ

て、お城

にわかれ

をつげた

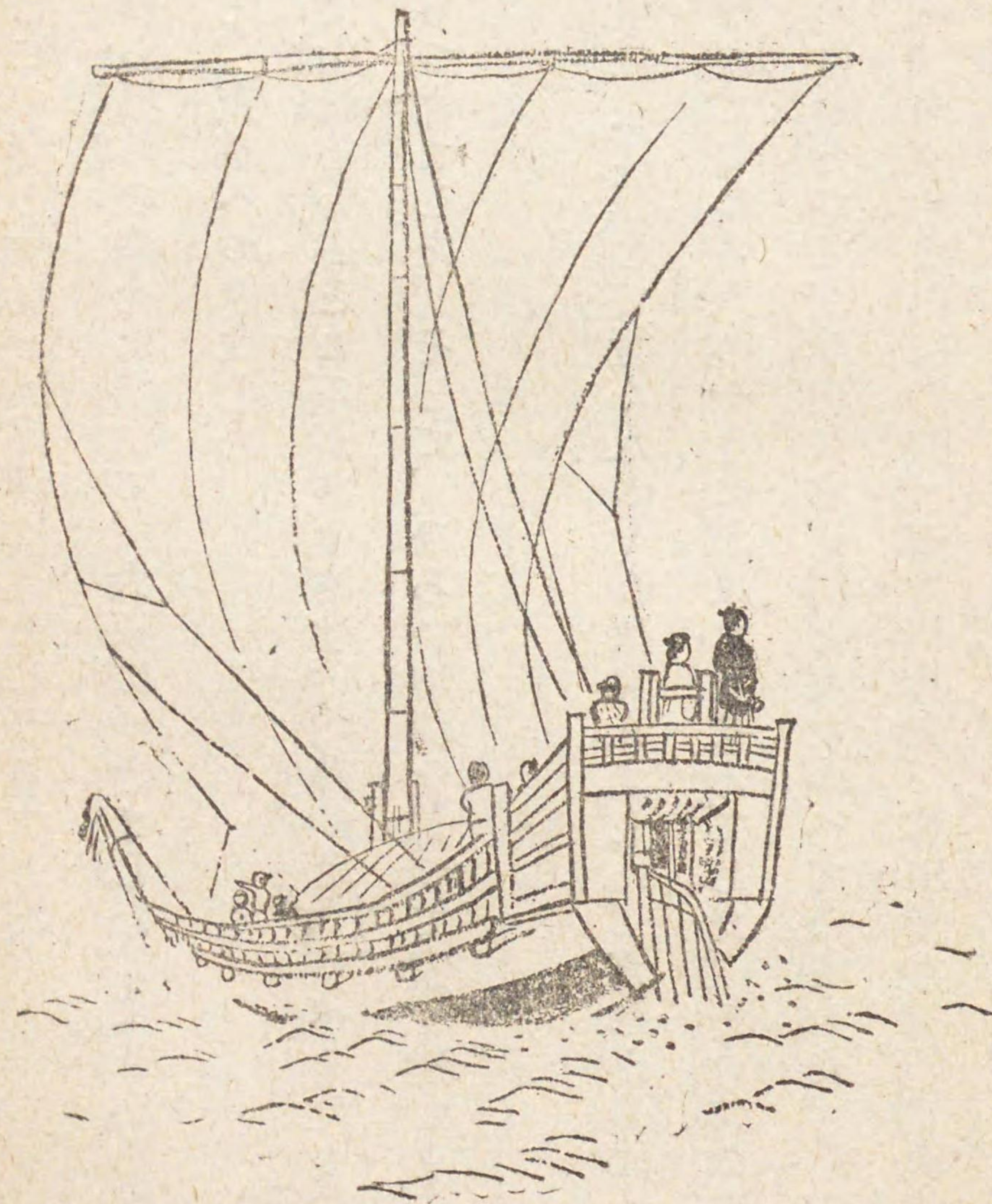
ことでせ

う。

内藏助

の眼は、

涙にくも



りました。そして、妻と主税とは、涙に袖をしぼりました。

船は、播磨から攝津の海をわたつて、大阪につきました。それから淀河を船で上つて、京都へつきました。

京都の近在に山科といふところがあります。内藏助は知るべをたよつて、そこに落ちつきました。そして、ひろい地面を買つて家を建てました。

それで、一生氣樂に暮して行く人のやうに見えました。だれが見ても敵討などをくはだててゐる人のやうに思はれませんでした。その時内藏助は、母の家の姓をとつて、池田久右衛門と名をかへてゐました。

十月になると、内藏助は奥田將監、河村傳兵衛、勝田新左衛門、中村清右衛門、岡本次郎左衛門など一しよに江戸に出ました。そして一方

に、大學頭に、淺野家を立てさせてもらふ奔走をして、一方に、こつそり同盟の人々と集りをして、敵討の時機などについて、いろいろに相談をしました。また、泉岳寺の内匠頭の墓にもまゐれば、内匠頭の奥方、瑤泉院にもお目にかかりに行きました。さうして、十一月の二十五日に、江戸をたつて山科へ歸りました。

そのころ同盟の人々が、だんだんにふえて、百十餘人からになつてゐました。その半分以上は、京都を中心に上方の方方にゐました。それで、吉良、上杉の方でも、びくびくして、いつもその間諜が、内藏助の身のまはりについてゐました。

その年は暮れて、あくる年の三月、はやくも内匠頭の一週忌が來ました。吉良、上杉では、間諜の數をふやして、ますます内藏助たちに警戒

を加へました。そこで内藏助は、酒を飲み、放蕩ほうとうをして、敵に油斷をさせようと思いました。そして妻を離縁りえんして、その實家、但馬たじま豊岡とよおか藩の家老石東源五兵衛いしづかのところへ歸しました。しかも主税だけは、手もとに残しましたが、あとの子は、吉千代も大三郎も、一人の女の子も、妻につけてやつてしまひました。ずるぶん思ひきつて、無法なことをしたのでした。

同盟の人々のうちにも「あまりらんばうすぎる。ほんとに魂がくさつてしまつたのであらう」といつて同盟からぬける人も、たくさんに出て來ました。奥野將監、小山源五衛門、進藤源四郎、河村清兵衛などが、その組の重立つた人でした。

するうちに、大學頭は、廣島の淺野の本家へおあづけになつて、内匠頭の家は、いよいよ立てられないこになりました。するとまた、同盟からぬける人がだいぶありました。

『去る者は去れ。』

内藏助はさういふやうな顔をしてゐました。さうして、づんづん討入の支度をしながら、放蕩をつづけてゐました。

そのうちに、堀部安兵衛、奥田孫太夫などの江戸の躍起組やくきぐみから、「はや、事を擧げよう。敵を討たう。」といつて、せまつて來ました。

内藏助にとつては、同盟をぬける人よりも、この躍起組の方がやつかに思はれました。なぜといへば、ぐづぐづしてゐると、この躍起組の人たちが、何をしでかすか知れないのですから。

主税は、そのころまで父の本心を知りませんでした。が、敵討の時機

もだんたんせまつて來ますと、内藏助はある日、その計畫を、すつかり主税に打明けました。しかし、強いて同盟に加はれとはいひませんでした。けれども主税は、むろん自分の考へとして、同盟に加はりました。そのころ、同盟の人々は、六十人ほどにへつてしまつてゐました。

同盟に加ると、まもなく主税は、但馬たじまの豊國へ行つて、母にそれとなくお別れをして來ました。さうして山科やましなに歸ると、それからまもなく、吉田忠左衛門らとともに、父よりも先きに、江戸にむかつて出發しました。

内匠頭が切腹してから、ちようど一年と七ヶ月ほど後のことでした。

七 討入の準備

元祿十五年十二月十四日、その十二月十四日は、淺野内匠頭の命日にあたつてゐました。内藏助ら四十七士は、その日をもつていよいよ討入りを決行することにしました。しかしその日が命日からといふので、討入りをその日にしたのではありません。四十七士の討入りには、そんなことを考へる餘裕よゆうなどはありませんでした。それほどに討入りは困難であり、かつ切迫せつぱくしてゐました。

敵討ちの同盟に加はつた者の一人に、富森助右衛門といふ武道にも文事にも、すぐれた勇士がありました。浪人してから、川崎在(今の神奈川縣 橘樹郡平間村)平間村の百姓、輕部五兵衛方の一間をかりて、そこに村の子どもを集めて、手習ししやうの師匠をしてゐました。

内藏助は山科やましなを引きはらつて江戸の方に下ると、ひとまづ、この五兵衛方に落ちつきました。それは、内藏助が江戸に下つたことを、上野介の方に知れないやうにしておく必要があつたからでした。

内藏助は七、八日ほど五兵衛方に逗留とまりゆうしてゐました。そして、すつかり江戸の様子を知つてから、江戸に出ました。内藏助は思慮しりょがめんみつて寸分の手ぬかりもありませんでした。

江戸へ來ると、日本橋本石町三丁目、小山屋彌兵衛といふ宿屋の裏店うちだなをかりて、かりの住居にしました。それが十一月の五日ごろのことでした。

主税は、垣見左内かきみさないと名をかへて、吉田忠左衛門のところにもたのですが、内藏助よりも二日前に、この宿屋の裏店に引き移つてゐました。そ

こで内藏助は、垣見五郎兵衛と名をかへました。吉田忠左衛門は、その前から軍學者田口一眞、または篠崎太郎兵衛と名をかへてゐました。

内藏助がこの裏店うちだなに入ると、小野寺十内と潮田又之丞うしほだと近松勘六かんのの三人が、そこに同居しました。そして十内は、醫師仙北十庵せんぼく。勘六が、森清助。又之丞が原田斧右衛門そのと、名をかへてゐました。そして、この内藏助ら五六人ばかりでなく、敵討ちの同盟に加はつた人々は、江戸では十人が八人まで、いろいろに假の名をつけて、赤穂浪人といふことをかくして、それぞれに活動してゐたのでした。そのうちでも有名なのは、前原爲助ゐすけ。これは米屋五兵衛といつて、上野介の邸の裏門に近い本所相あは生町おひに、米屋を出してゐました。また千崎彌五郎は、小豆屋吉兵衛あづまや(善兵衛だともいひます)といつて、これもその近所に穀物屋こくもつやを出してゐまし

た。

そのほか本所方面には、高田馬場の仇討ちで有名な堀部安兵衛が、林町の紀國屋敷に、長江長左衛門と名をかへてゐました。そして、そこには木村岡右衛門が、原田左膳と名をかへ、後ににげて不義士の悪名を残した毛利小平太が、木原武右衛門といつて、一しよにをりました。

安兵衛のところには、このほか横川勘平や、これも後ににげて不義士のお仲間になつた小山田庄左衛門や中村清右衛門などが、一しよにゐました。

本所のこの方には、この外にまだ、武林唯七が、渡邊七郎左衛門といつて、徳右衛門町一丁目にゐました。そこには勝田新左衛門と、それから杉野十平次が、劍客杉野九一右衛門といつて一しよにゐました。

それから片岡源五右衛門も吉岡勝兵衛といつて、しばらく林町三丁目にをりました。そこには大高源吾が、脇屋新兵衛。矢頭右衛門七が、清水右衛門七。貝賀彌左衛門が、尾張浪人といつて、一しよにゐました。また後ににげて不義士になりましたが、田中貞四郎も、醫師田中玄昌といつて一しよにゐました。

しかしこの人たちは、討入りの少し前に、南八丁堀、港町の方へ引越しました。そのかはり村松喜兵衛が、醫師村松隆圓といつて、南八丁堀から本所の方へ引移りました。

前原爲助、神崎與五郎をはじめ以上の人々と、馬淵市郎左衛門といつて、兩國の矢の倉米澤町にゐた堀部彌兵衛と、それから深川黒江町に借家して、西村清右衛門、同苗、丹下といつてゐた奥田孫太夫、貞右衛門

父子などは、ながらく江戸邸やしきにゐて、江戸の事情を、よく知つてゐました。それが上野介の邸に近い、本所方面にちらばつて、めいめい敵かたきの様子をさぐつたり、監視かんししたりしてゐたのでした。

次に原惣右衛門そうは、醫師和田元眞。不破數右衛門が、松井仁太夫。忠左衛門の子の澤右衛門が、左平太といつて、いづれも麴町五丁目喜右衛門店だんに、吉田忠左衛門と一しよにゐました。寺坂吉右衛門もそこにゐました。

少しはなれて、麴町四丁目の五郎兵衛店だんには、岡島八十右衛門が、郡武八郎。中村勘助が、山彦喜兵衛。間瀬久太夫が、醫師三橋海貞うみさだ。その子の孫九郎が、三橋小市郎。小野寺幸右衛門が、仙北又助せんほく。岡野金右衛門が、九十郎といつて、六人一しよにをりました。そして、その裏町の

七郎右衛門店だんには、千馬三郎兵衛が、原三助。間喜兵衛まきべいが、醫師柚庄喜齋きさい。その子の十次郎が、柚庄伴七郎ばんといつて、間新六と、それに後ににげた中田理平次と五人が一しよにをりました。それから富森助右衛門も山本七左衛門といつてゐましたが、平間村を引上げると、妻子とともに麴町五丁目に借家をしてゐました。

まだこの他に、芝の源助町に、磯貝十郎左衛門が、内藤十郎左衛門。茅野和助かほのが、富田藤吾とうごといつて、村松三太夫と三人一しよに、わびしい借家住ひをしてゐました。そして、その近くの濱松町には、赤埴源藏あかばねが高島源五衛門、矢田五郎右衛門が、塙武助はなはと名をかへて一しよにをりました。さうして、大石瀨左衛門、早水藤左衛門はやみ、菅谷半之丞すかや、三村治郎左衛門の四人は、いづれも本名のまま、内藏助のところの一しよにを

りました。それからもう一人、倉橋傳助、これも本名のまま神崎與五郎のおつちや小豆屋の店たなで、わかい者になつて働いてゐました。

以上、本名のままの人と、假の名をつけてゐた人とを合はせると、五十二人あります。赤穂四十七士といふには、五人多いことになりましたがそれは、小山田庄左衛門、毛利小平太、中村清右衛門、田中貞四郎、田中理平次など、五人の者が、いざ討入りも近くなつたといふ時になつてきふに命を惜しんで、逃げだしたからでした。そして内藏助が江戸に來てから、かういふ卑怯者ひけつものが、この外にまだ三人もありました。

一方には、そんな卑怯者が出る。一方には、上野介の用心がきびしくて、なかなか討入りの見當がつかない。江戸へ來てからの内藏助の苦心は、じつにさんたんたるものでした。

『討入るのは何でもなし。だが討入つて、上野介の邸をふみ荒すだけが目的ではない。のぞみは上野介の首である。もし、その首を取りそこなつたら、せつかくの苦心も水の泡。二度と討入ることは出來ないのだ。』内藏助が心をくだいて、大事の上にも大事をとつたのはこの點です。つまり、上野介の首を取りそこなへば、それきり、一同むざむざ死んでしまはなければならぬからでした。

何といつても吉良上野介には、上杉家十五萬石といふ大々名の後楯うしろだてがありました。しかもそれが、尋常の後楯、ふつうの味方ではありません。

上野介の奥方は、上杉家から來た人でした。そして上杉家の當主綱憲つなひは、その人の子——即ち、上野介の子でした。その上に、その綱憲の子がまた、吉良家を相續さうぞくして、左兵衛亮義周さひやうのすけよしといつてゐました。

上野介と上杉家とは、かういふ深い血すぢの関係がありました。それで上杉家から大ぜいの勇士が、上野介の邸に行つてをりました。そして上野介をまもつてゐました。

また、内藏助が、まだ山科やましなを根據こんきよにしてゐる時分から、上杉家では、その方面だけでも、十數人の間諜かんていを使つて、赤穂浪人の様子をさぐらせてゐました。内藏助らは、この間諜の眼をくりますすだけに、何ほどの苦心をしましたらう。内藏助が山科に家をつくつたり、毎日お酒ばかり飲んでのらくら者になつてゐたのは、まつたくそのためでした。

上杉家の方ではまた、内藏助らの様子をさぐつて、もし赤穂浪人が江戸へ来て、上野介を見つけねらふやうであつたら、いつでも上野介を、上杉の領分羽前つばさの米澤へ、つれて行く手くばりがしてありました。

それで上野介は、三田三光坂の上杉の下屋敷しもの方にゐたり、または本所の自分の屋敷の方へ歸つたりしてゐました。さうして、わざと上野介が、どつちにゐるのか、わからないやうにしてあるので、内藏助らは、うっかり討入りを斷行することが出来ませんでした。

『上野介殿の首は、どうしても、本所の邸の方で擧げなければなりません。どなたも、上野介殿が邸にゐらるる日を、たしかにお突きとめ下さう。』

内藏助はかたい決心で、まづ同盟の人々にむかつて、さういふ指圖をしました。そしてそれが、討入り前の、もつとも大切な仕事の一つでした。

昔の人の言葉に、

「此事、易きが如くして、
實に難し。」

といつてありま

すが、内藏助らが

上野介の邸にゐる日

を突きとめようとする

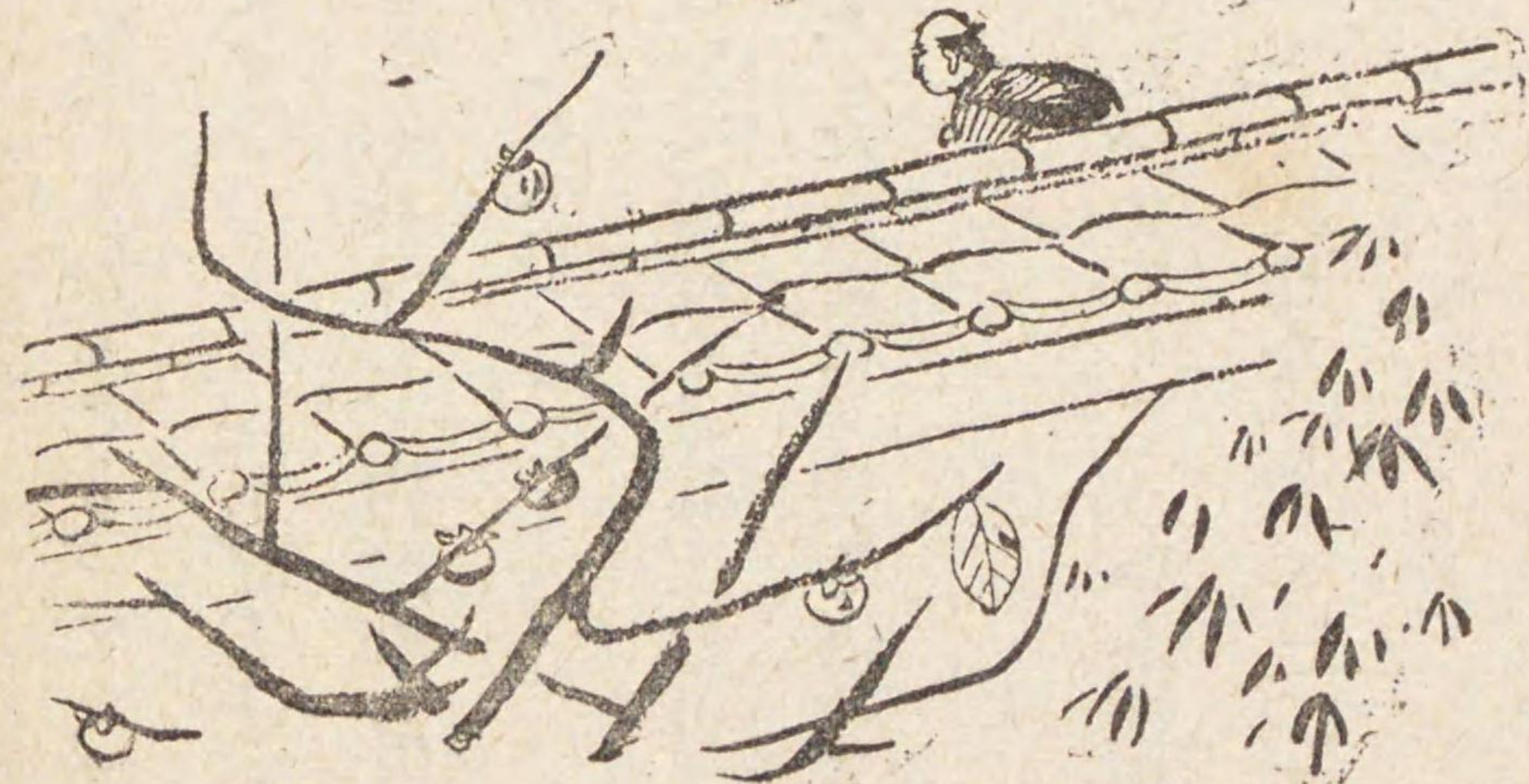
ことは、まつたくそのと

ほりでした。

上野介の方には、用心の上

の用心がありました。それで出る

にも入るにも、いつも裏門からば



かりでした。それも四位の少將と

いふ、格式をくづして、乗物をか

へてゐるし、行列も略してゐまし

た。それでだれが出て行つて、だ

れが歸つて來たのか、ちつともわ

かりませんでした。

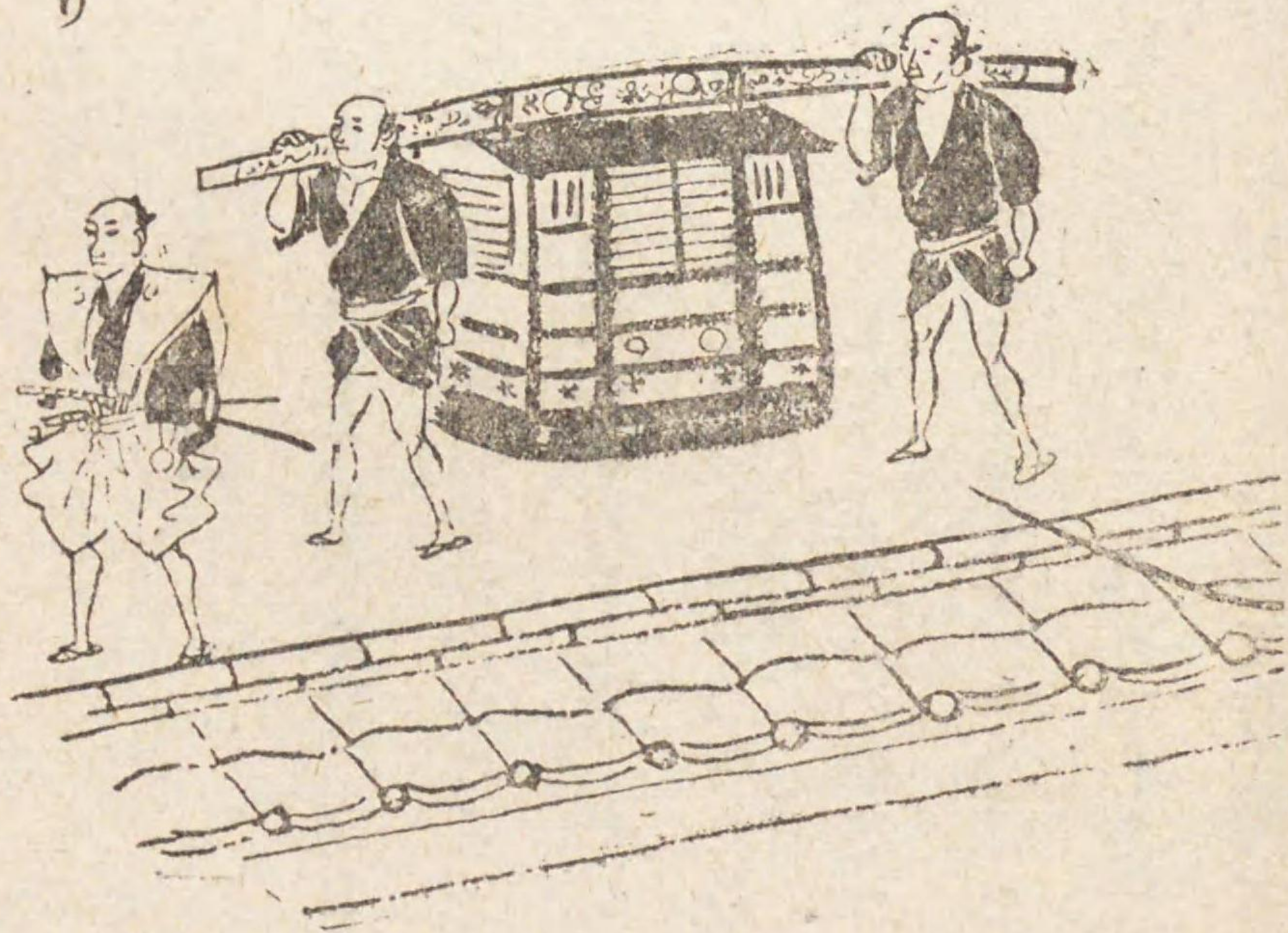
その裏門の近くには、前原爲助と

神崎與五郎、それに倉橋傳助とが、

朝から晩まで、眼を光らして、ぐわん

ばつてゐたのですが、どうしてもわかり

ませんでした。いや、上野介の顔さへ知る



ことが出来ませんでした。そして三人が、苦心に苦心して、やつと上野介の邸の繪圖面を一枚手に入れただけでした。

『こんなことをしてゐて、いつ、討入りが出来るとだ。』

若い人たちは血をわかせ、業をにやしました。そしてめいめい、思ひ思ひに姿をやつし、三人四人と組をつくつて、夜と晝、かはかがる三光坂の方と、本所の方と兩方へ、上野介を見張りに出かけました。

けれども、それもむだでした。いくら行つても、上野介がどつちにゐるのかわかりませんでした。さうしてだれ一人として、上野介の顔さへも、見知ることが出来ませんでした。讐を討たうとする者が、敵の顔さへも知らぬとは、いかにも妙な話のやうですが、ほんとにさうでした。

げんに、内匠頭が刃傷の當日、そのお供をして行つた片岡源五右衛門で

さへも、まだ一度も上野介の顔を見たことがありませんでした。まして國の方にゐた内藏助やその他の人々です。その時まだ、五十餘人もゐた同盟の人々のうちに、一人として上野介の顔を知つてゐる者がありませんでした。

『よしや、討入つたにしても、かんじんの目ざす敵の顔を知らんではいかん。これはぜひとも、たとへ三人五人でも、あらかじめ上野介殿の顔を見知つておく必要がある。』

内藏助は、さう思ひました。そして、そのことを同盟の人々に語りました。

『もちろん、それは大切なことです。』

同盟の人々も、みなさういつて、上野介の顔を見知ること、一生懸

命になりました。

一方には、上野介の出入を嚴重に見張る。一方には、市中をうろついて、上野介の行列に出あつて、その顔を見知らうとする。毎日々々同盟の人々は、目に見えない、そして、根氣のいる活動に、その辛抱しんぱうと苦心とが大へんでした。ことに、上杉家と吉良家との間の二つの路すぢには夜も晝も、四人または二人の人が、かはるがはる見張りに、ぐわんばつてゐました。そしてその人たちは、もし上野介に出あつて、くわつとするやうなことがあつてはならないと、だれでも七首あひくち一つ、身につけてゐませんでした。その上に、まだ何かのまちがひがあつてはと、吉田忠左衛門や原惣右衛門など、沈着な老人たちが、わかい人々にまじつて、その秘密のはたらきを見まはつてをりました。

内藏助の注意は、どこまでも行きとどいて、すべての計畫が一つ一つめんみつに行はれました。

しかしいつまでも、ぐづぐづしてゐては、赤穂浪人が大ぜい江戸に入りこんでゐることを、いつか敵の方へ知られてしまふ心配がありました。それに内藏助の手元にあるお金も、一日々々に少くなつて、もうたくさんありませんでした。

内藏助や小野寺十内、吉田忠左衛門などには、この重くるしい心配もありました。

いつたい、同盟に加はつてゐる人々は、たいがい貧乏でした。それに二年近くも浪人をして、みなその貯へをなくしてしまつてゐました。それでみんなが、内藏助からお金をもらつて、それで暮らし、それで働い

てみました。

その内藏助も、お金をたくさん持つてゐたのではありません。ただ事を擧げるまでの、相應の用意をしてゐただけでした。それもいろいろの準備やなどで、もうわづかしか残つてゐないやうになつてみました。

「乞食こじまになつても……。」

もちろん乞食になつても、敵は討てます。けれども内藏助は、それを赤穂武士の恥であり、内匠頭の名前までも傷つけることだと思つて、大そうきらつてをりました。

「赤穂の浪人どもは、喰ふに困つて、吉良家へらんばうに出かけた。」

と、さう思はれることが残念でした。さう思はれないやうにと思つて、内藏助はいろいろに心をくだきました。

お金のなくならないうちに。

同盟の人の心が、ばらばらにならないうちに。

内藏助も、討入りに心がせてをりました。

「如何ですか。討入りの日を、暮の三十一日の夜にしようではありませんか。あくれば元日です。いくら上野介殿でも、元日には邸にゐるでせう。」

十一月の末のころ、原惣右衛門がやつて来て、内藏助に決定をせまるやうに、いひました。

「いい考へです。」

と、そばにゐた小野寺十内もいひました。

「いや……。」

内藏助は、しづかに首をふりました。

『元日に、お膝元ひざもとに血を流し、市中をさわがせることは、つつしまなければなりませんまい。』

『すると……。』

惣右衛門は、大いに不服な顔を見せました。

内藏助はしばらくだまつてみましたが、やがて、

『來月十九日は、節分にあたります。たぶん節分には、邸にをられると思ひます。』

と、いひました。

『なるほど、その日ならばまちがひありますまい。では、節分の夜にしようではありませんか。』

惣右衛門は、あくまでも討入りの日を、決めてしまはうとしました。

そして、討入りの日は、ひとまづ十二月十九日ときまりかけました。それを聞いて、躍起やっせ組の堀部安兵衛、奥田孫太夫をはじめ、血氣にはやる人たちは、こをどりしてよろこび、勇みました。

ちやうどそのころ、赤穂で大野九郎兵衛をやつつけた岡島八十右衛門が、日比谷門のところ、上野介の行列にぶつかつて、土下座どげざをしました。土下座といふのは、大地にびたりとすわつて、おじぎをするのです。これは自分の主人の親類とか、縁者の大名の駕籠かごがとほると、さうするのがそのころの侍の作法としてありました。すると、土下座をされた大名の方でも、きつと駕籠の引戸を少しあけて「どこの藩か、姓名は」と、きくのが例になつてゐました。八十右衛門は、上野介の顔が見たい

ばかりに、あまんじて敵にむかつて土下座をしたのでした。

上野介は、まさか赤穂のものが、自分にむかつて土下座をしようとは思ひませんでした。で、駕籠の引戸をあけて、

『どこの藩のものぢや。』

と、たづねました。

『松浦肥前守の家來にございます。』

八十右衛門は頭をあげて、はつきり上野介の顔を見ました。

『姓名は……。』

『軽い身分のものでございます。申上げるほどのものでございません。』



八十右衛門は、つつましく

いひました。それで上野介

の行列は、づつと通つて行

つてしまひました。松浦

肥前守といふのは、上野

介と縁者でした。

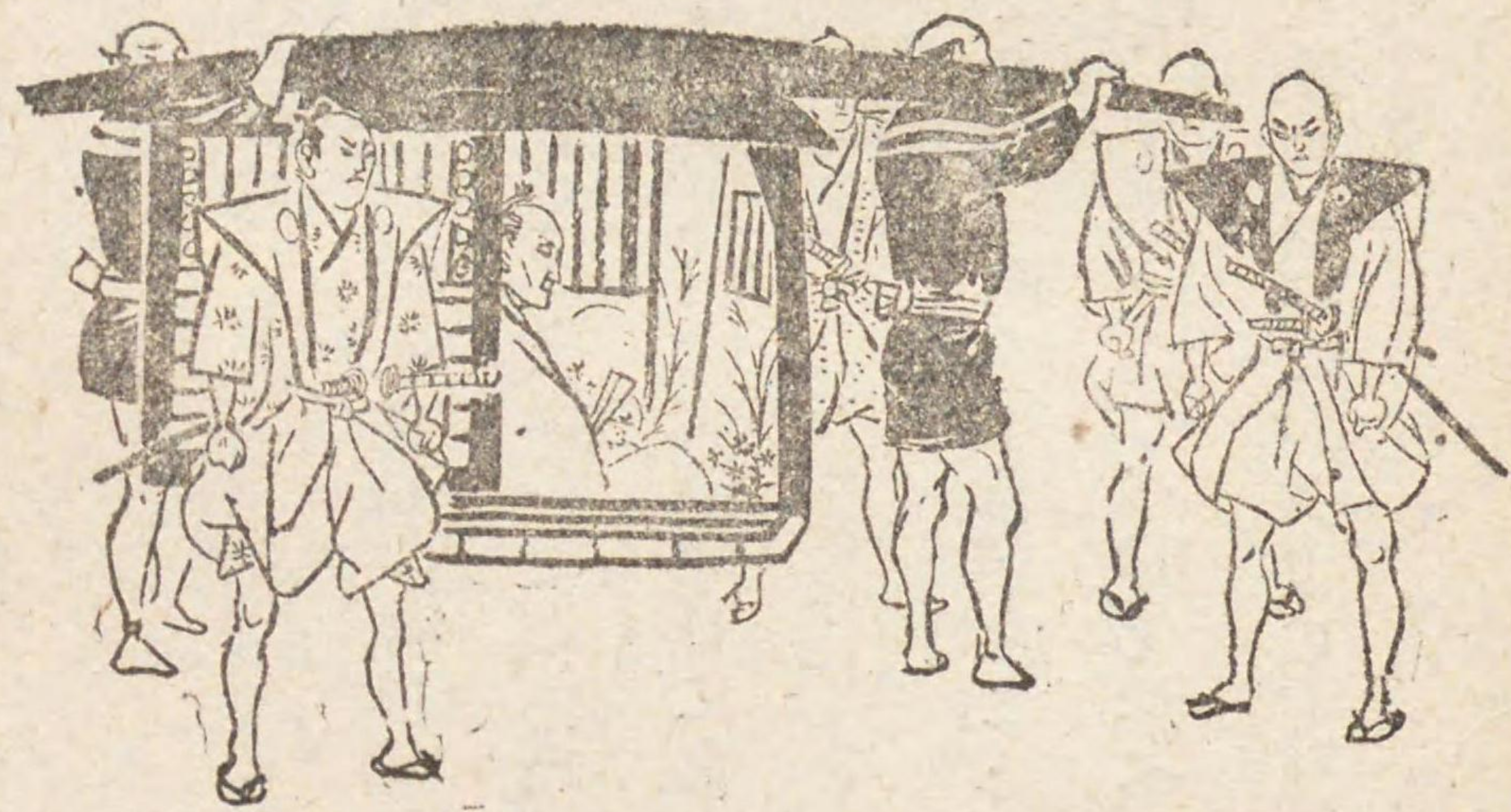
この八十右衛門の「收

穫くわく」——ただ敵の顔を見

たといふだけの收穫も、

同盟の人々にとつて、ずゐ

ぶん大きなよろこびでした。



そこへ堀部安兵衛が、また一つの大きな収穫を持つて来ました。それは天の加護^ごとでもいふやうな吉報でした。

安兵衛は、ある剣道指南の浪人から、

『十二月十四日には、上野介の邸に大茶會のもよほしがある。』

と、聞きこんで来たのです。しかも、それがたしかな様子でした。

十四日——その日はちやうど、主人内匠頭の命日にあたるではありませんか。

『亡き殿の御靈^{みたま}のおみちびきてせう。ああ不思議なことです。』

忠左衛門や十内、惣右衛門は、さういつて、涙を浮べてよろこびました。いつたん、十二月十九日に決められた討入りの日は、一決して十四日にくり上げられました。

安兵衛、數右衛門、孫太夫、五郎右衛門——さういふ腕ききの人たちは、こうふんして、

『なに、上杉の奴ばらが、何ほど加勢したといつたとて……。』

と、りりんたる勇氣——久しぶりで、はれはれしい顔を見せました。

内藏助は、しかしいつものやうに、じつと唇をとぢたきりでした。眉一つ動かさうともしませんでした。そして、やがて重々しく唇をひらいて、『なほ、よつく様子をさぐりませう。それには、どなたか、茶道の心得ある方が、吉良家へ出入りの茶の師匠のところに、入門をなさるのです。そして、はたして十四日に、吉良家に茶會があるかどうか、それをたしかめて下さるのです。』

一同は深くうなづきました。

『さうです。どこまでもたしかめませう。さいはひ大高氏が、なかなか茶のたしなみがございます。あれならば、どこへ出ましても、おそろくひけはとらないでせう。』

かう保證をつけたのは、安兵衛でした。さうして大高源吾が、この大切な役目を引受けることになりました。

源吾は、俳號はいごうを子葉しよふといつて、名高い寶井其角たからゐきかくの弟子でした。

討入りの前の日に、兩國橋の近べんを、「竹よ、竹々」といつて、煤竹すすたけを賣つてあるいて、敵の様子をさぐらうとしてみると、其角にてつくわしました。そこで其角が「年の瀬や水の流も人の身も」と、一句やりますと、源吾は、あすの十四日が待たれるといふ意味で「あした待たるるその寶船」と、其角の句につけたといふことが傳はつてゐますが、これ

は「いろは文庫」といふ本にあるつくり話です。しかし源吾は、俳諧はいかいも出来、茶の湯も出来て、同盟の人々のうちでは、富森助右衛門とともに一對つゝの風流人でした。それで、さういふ方面の知己も、たくさんありました。

源吾はそのころ、假の名を脇屋新兵衛といつて、鬻ばいも小銀杏こいんぎよに、すつかり商人姿になつてゐました。そこで、それからそれへと手づるをもとめて、吉良家へ出入の茶の師匠をさぐりました。それはすぐにわかりました。

上野介のところへ出入りする茶の師匠は、四方庵山田宗遍しほうあん さんぜん しようへんといつて、當時の名家でした。それに、老中小笠原佐渡守おさだのかみが大そう引立てて、住居もその屋敷のうちにありました。

源吾は、京都の呉服屋だといつて、有福な商人になりすまして、宗遍そうへんのところへ弟子入りをしました。おみやげに、縮緬ちぢめん一匹ひきと金千疋おきとを持つて行きました。

宗遍は氣位が高く、なかなか町人などを相手にしないのですが、源吾が茶の心得が深く、そしてその様子に、風流人の氣もちが見えたので相應にあしらつて、いろいろ茶の湯の話をしました。源吾はまた、かうまんな師匠のよろこぶやうな、いろいろなことをたづねました。さうしてその日は、ちかづきになつただけで歸りました。

それから三度四度と、源吾は茶の湯にかこつけては、宗遍のところへたづねて行きました。さうしてだんだん懇意こんいになりました。しかし、なかなか、

『うけたまはれば、この十四日には、吉良様のお屋敷に、けつこうなお茶會のおもよほしがあるさうでございますが、さやうでございますか。』と、思ふ的まことへぶつかつて行きます。ぶつかりそこなつて、こいつとにらまれたら、もうそれきりになつてしまふのですから。

源吾は、そこへするどく、神経をはたらかせてみました。しかもけつして、あせりませんでした。そして拔目なく、機會をねらつてみました。

いよいよ明日が、十四日といふせつばつまつた日になりました。朝からちらちら雪がふつて、午ひるごろになると、だいぶ大片ひらなのが降つて来るやうになりました。

源吾は、一兩の鰻うなぎの切手をみやげに持つて、降りしきる雪の中を、宗

遍のところへたづねて行きました。ほんとに、風流の道をたのしむといふやうにして。

『けつこうなものが降つてまゐりました。』

『よくおいでになりました。お雪見ですか。どうやらつもりさうです。』

おたがひにそんな挨拶があつて、

さて源吾は様子をあらためました。

『わたくしも當年は、こちら

でお年越をするつもりでを

りましたのが、昨日京表

の方から、急飛脚がまる

りまして、明後日は京



へ出立するやうになり

ました。つきまして

は、當座のお名残、

宗匠のお風味を(茶

のこと)一服ちやう

だいして、歸りた

いと存じます。い

かがでございませ

う。お差支がござい

ませんでしたら、明十四

日、夕景からでございませと、



わたくしの都合はよいのでございますが。』

『ほう、それはそれは。せつかくおなじみになりましたに、お名残がをしい。』

と、宗遍はちよつといひにくさうにして、

『しかし明日は、あひにくほかにお約束がありますのでな。』

『あ、お差支がございますか。』

と、源吾はいかにもがっかりしたやうにいひました。

『はい、じつはな、明日は、本所吉良様のお屋敷で、お年忘れのお茶會がございます。それでわたくしも、ぜひともそれへ、まゐらなければなりません。』

「しめた」と、源吾は腹の中で叫びました。何のことでもない、ただそれだけが聞きたかつたのです。しかし顔にはそれを出さず、

『さやうでございますか。それならば、出立を一日のばして、十五日ではいかがでございませう。』

『十五日ならば、よろしうございます。』

源吾の放つた矢は、みごとに的にあたりました。

大よろこびで、宗遍に別れをつげて、そこを出ると、すぐにその足で内藏助のところへ行つて、事の次第を知らせました。

十四日、討入りは、いよいよ動かぬものとなりました。同盟の人々のところへは、すぐに「廻文」がまはされました。むろん、いつさいの準備、討入りの陣立ては、前々から充分にととのひ、かつ充分に申合せてありました。人々は落ちついて 妻子、肉親、知己、朋友はういづにあてて、そ

れぞれに最後の手紙を出したりしました。

八 十二月十四日

前の日から降りつづいた雪は、十四日になつても晴れませんでした。江戸にはまれな大雪は、八百八町をうづめつくしました。同盟の義士にとつては、それがさながら本望成就の瑞相かと思はれました。

上野介の屋敷では、大友、品川など、高家歴々の茶會の客は、夜になつても歸りませんでした。ともしびは、あかあかと庭の雪に照りはえて、それが一としほ風流の客をよろこばせました。そして客が歸り、このと

もしびの光が雪の上から消えたのは、夜の四ツ(十時)ごろのことでした。運命ほど不思議なものはありません。間ごと間ごとからこのともしびの光が消えたとき、あたかもそのやうに、上野介の運命もつきてゐたのでした。そのころに、雪はあがつて、深巖にすみわたつた空には、星の光がきらきらとさえてゐました。

その日内藏助は、主税や二三人のものとしよに、泉岳寺へ行つて、内匠頭のお墓へお詣りをしました。それから夜になつて、ちやうど上野介の屋敷のともしびが暗くなつたところに、本石町の假住居を出て、兩國矢の倉の堀部彌兵衛の假宅へやつて來ました。

そこには、小野寺十内、片岡源五右衛門、早水藤左衛門、大石瀨左衛門、近松勘六、潮田又之丞、菅谷半之丞など、十餘人の人が集まつてゐ